

叡山松禪院文書

ここに紹介するのは、三重県津市の坂口茂氏所蔵、比叡山横川飯室谷の塔中松禪院に伝えられた文書群である。文書は、「叡山松禪院文書」と墨書された木箱に収められているので、紹介するに当たっては「叡山松禪院文書」と仮称する。文書群は、成卷文書十三卷百通、未成卷文書十二通、計一二通を数える。本書ではこのうち、伊藤長胤筆「松禪院藏大師求法目錄跋語」、「密嚴院大僧都義運書状」写の二通、「義堯法親王筆詠草」一卷を除いて収録した。なお、この他、昭和四十一年五月に、某氏（不明）によって整理作成された「松禪院旧藏古文書目録」一冊があるが、紙幅の関係から省略した。

松禪院については、その創建を始め、近世以前の歴史は不明な点が多い。某氏作成の目録には、「当国の守護佐々木泰綱の寄進により仁治年中（一二四〇～四三）に創建」と述べられているが、その根拠は明らかではない。織田信長による「元亀兵火」以前については、大永七（一五二七）年、享禄二（一五二九）年に、「松禪院隆慶」の存在が確認できるのみである（村山修一編『葛川明王院史料』五六六号「行者大帳議定抜書」、一三四号「葛川三月会行者中衆議条々事書」）。正徳三・四（一七二三・一四）年にかけて智湛によって編さんされた

稲 本 紀 昭

『横川堂舎並各坊世譜』（『天台宗全書』二十四卷所収。以下『横川世譜』と略称する）の記述によれば、永禄八（一五六五）年正月、「本州刺史義実」が衣川（堅田町）を割き、亮俊に寄進したとある。

この亮俊は、永禄十年十月八日の「臨時会条々事書」（『葛川明王院史料』一三八号）にその名がみえるが、智湛が何によって記述したかは不明である（「刺史義実」は六角義賢の誤りであろうか）。以下、『横川世譜』によって歴代院主をあげれば、

○第一世 玄俊。蒲生右兵衛大夫氏高子息（右兵衛大夫氏郷の誤りか）。元亀の兵火で亮俊は退去したため、復興後の松禪院院主となる。
天正十一（一五八三）年、義実から和爾（志賀町）百貫文の地を、文禄三（一五九四）年、「秀忠公夫人」より米二十石、慶長五（一六〇〇）年、徳川家康より「斎資百石」、同六年に蒲生秀行より百石、さらに徳川家光より百石を与えられたという。慶長十七年十二月十二日寂。

玄俊の名は、前掲『葛川明王院史料』、京都大学博物館所蔵「葛川明王院文書」等に頻出する。もっとも、義実や「秀忠公夫人」の寄進を示す史料は不明である（後者については、前掲「行者大帳議定抜

窓 書「天正十八年の項に、「松禪院以馳走、当会（六月会）中祈禱護摩之施主在之（中略）施物京到廿、石云々」とあるのを指すのであろうか）。蒲生秀行の寄進は、本文四五号文書で明らかであるが、家光による寄進は三世乗俊代の誤解であらう。

○第二世 慶俊。蒲生郷成子息。首楞嚴院別当職を兼ねる。寛永八（一六三一）年没。郷成は氏郷・秀行に仕えた老臣。

○第三世 乗俊。蒲生一族大塚氏出身。横川戒心谷龍禪院院主より、師の死去により、寛永八年、松禪院に入る。西塔福生院・恵光院を監し、同二十一年には滋賀院・南光坊・毘沙門堂をも監す。正保四（一六四七）年八月二十六日寂。龍禪院・恵雲院・戒光院の三房を造営するなど「功当房、不尽記」とある。また同書、恵心院の項に、「第五世大僧正天海、寛永五年当房空主時、大僧正兼帶首楞嚴院別当職、松禪院乗俊受僧正命監守、建厨所」とあり、天海より信頼された人物であったことは文書からもうかがわれる。

○第四世 実俊。蒲生一族出身。寛永八年、師の跡をうけ龍禪院に入り、乗俊没後、正保四年院主となる。万治二（一六五九）年四月二十七日寂。

○第五世 尊俊。堀川宰相則康子息。元禄九（一六九四）年寂。以下略。

次に文書群をその内容から大別すると、

① 正親町天皇綸旨以下執行代触状など、延暦寺再興とその後の寺務に関わるもの。これらの文書が松禪院に伝来したのは、二世慶俊が首楞嚴院別当を勤めたこと、また乗俊も恵心院等を「監守」したことによるものであらう。

② 將軍祈禱料下行をめぐる一連の文書群。東福門院、春日局、英勝院、天海、九条家など登場人物は多彩で、下行が実現するまでの過程が知られるとともに、初期家光政権の性格の一端をうかがいうるものとして興味がある。

③ 蒲生氏関係。これは一〇四世までが蒲生氏出身であることを考えれば当然であらう。

④ 三世乗俊の遺言状（案文）と実俊相続関連文書。有力な外護者蒲生氏の没落は少なからず乗俊に影響を与えたものと想像でき、同じ蒲生一族出身の弟子実俊の相続に意をつかったことがうかがわれる。

⑤ 將軍・東福門院よりの祈禱命令とそれに関連する文書群。

⑥ その他。

以上のように大別できるが、文書の年代は五世尊俊代で終わっている。

本文書を翻刻するに当たっては、

(1) 文書の排列は、未成卷文書、成卷文書としたが、成卷文書については年代を考慮したものの、必ずしも類別・時代別に成卷されているとは限らないので、結果的に不整合になった箇所がままある。

(2) 原文書の形態を尊重すべきであるが、印刷の関係もあって大幅に改めた。その際、段落については、「」で示した。

(3) 変体仮名・略字・旧字体はそれぞれ、現行の仮名、字体に改めたが、

変体仮名「者・而・茂・江・与・ゐ・ゑ」、旧字体「條・處・證」

略字「ぶ」

は原文書のままとした。

- (4) 擦切れ、破損のため判読できない文字については□で示した。
- (5) 抹消した文字について、判読可能な場合はを以って示し、判読不能の場合は■で示した。
- (6) 法量はたて×よこcmで示した。

なお、解説・注記にあたっては、辻善之助『日本仏教史』第七巻・近世編之一、武覚超『比叡山三塔諸堂沿革史』、村山修一『比叡山史―闘いと祈りの聖域』などを参考にさせていただいた。

末筆ながら、所蔵者坂口茂氏にはご多忙中にもかかわらず、度々の調査にも心よく応じて下さり、また翻刻に際しては快諾をいただき、深甚に感謝する次第である。

なお、本文書の調査は、三重県史編さん室による県内所在史料調査の一環として行われたが、本誌に紹介することを了承され、そのうえ、写真の使用も許可して下さい。厚く御礼を申しあげる次第である。

一 正親町天皇編旨(宿紙)

三三・二×四三・二

(包紙上書)

一 探題中

左中弁充房

就叡岳再興、満徒」既帰山之条、法花会」執行事、可為勧誘干」諸国之学侶、全重昌于」一宗之嘉会之旨、
天氣之所候也

天正十二年十一月二日

(恵心院亮信)
探題中

○豊臣政権下における延暦寺復興の動きについては、辻善之助・武覚超氏前掲書に委しく述べられている。本文書は『横川世譜』恵心院の項にみえる、天正十二年、恵心院亮信に与えられたという「法華会興復之編旨」に該当する。

二 板倉重宗書状(折紙)

三四・〇×五一・四

御書拝見仕候、「被仰下候松禅院」御祈禱領之儀、御」書面之趣、得其意」奉存候、猶、期貴顔」之節候条、可然様」頼入候、恐々謹言
十月廿一日
板倉周防守
重宗(花押)

信濃小路淡路殿
(富増)

○信濃小路富増は九条家々司である。

三 九条忠栄書状案(折紙)

三三・七×五三・〇

尚々、御祈禱領之事、「有来候やうに、大望之」至ニ候、以

先年令入魂候き、「松禅院数年仕」来候六・七ヶ年以來」分御祈禱領并」自今以後之儀も」今度、於江戸、御取」成奉頼存候由、望申候、かしく

初冬廿一日

(九条忠栄)
御判

板倉周防守殿

「從九条殿様之御書之写」

四 権大納言局消息(折紙)

三五・六×五二・五

なおめてたくかしく

窓 国母さまより「此さらし三疋、」御しうきまでに「つかへされ候、」

史 めてたく「いく久しくものと」御事にて給候、(折り返し)「わか身よりも」沓分

百疋「まいらせ候、」いく久しくと「いわぬ入」まいらせ候、「あな

かしく

(上書) せうせん院まいる

申し給へ

こん

大納言

○大納言局は東福門院和子の女房。橋本氏出身。

五 権大納言局消息(折紙)

三五・四×五三・五

わたくしより、「此金沓分もくろくのことく、」いわぬ候

て、「まいらせ候、」(行題)し合よく、やかてく、「おのほりの

御事」まち入まいらせ候、」めてたくかしく

こんと

(東福門院) 国母さま御わつらひに「つき、御きたうの御事」申候へハ、よくく

御せいニ入候「ゆへ、やかてく御すきと」御はんふくの御事候、」

めてたく思いまいらせ候、「此銀子三枚、つかへされ候」まゝ、いく

久「しくと」御いたゞき候へく候、「いよく御さわくの御事」申

候へく候、(龍神院、実俊)りうせん院へも「よく御申をき候へく候、」こんと江戸へ

御くたりの「御事、めてたく思いまいらせ候、」さりなから、とを

くの所」御大きと思いまいらせ候、」かしく

こん

大納言

せうせん院まいる

六 祈禱料覚

(東福門院) 女院御所さま御きたう大師千さ、(座)御はつを

一 銀子 拾枚

女院御所さま御きたうさんわう御八かう(山王)

一 同 五枚

以上十月ふん

女院御所さま御きたう大師千さ

一 銀子 拾枚

女あんの御所さま御きたうさんわう御八かう

一 同 五枚

以上霜月ふん

女院御所さま御きたう大師千さ

一 銀子 拾枚

女あんの御所さま御きたうさんわう御八かう

一 同 五枚

以上十二月ふん

七 祈禱料覚

おほえ

女院御所さまより

一 小袖 一かさねかをりより

銀子 五枚

一 銀子 十枚

うへくさま御はしまつりの御はつを

以上

子
十二月廿七日

八 祈禱料覚

(東福門院)
国母さま、こんとの御わつらいニつき、御いのちこいの「御きたうの

事

一 さんわう七しやへ、御八かう月々に「あそはし候事

此入め、金小はん七兩

一 くわんさん大しの御まへにて、月々に「三千さのおこないの事

此入め、金小はん式十一兩 此外に

右二色の御きたうの御まかないりやうに、金小はん二兩「何も一月ふ
んにて候

ことしより、らいねん中まで「いづれも御りうくわん也

九 智積院運敵・小池坊頼意連署書状(折紙)

三三・〇×五一・六

就東寺御影堂上「葺之企有之、任先例、」諸国一宗へ被勸助力候、
依之

仁和寺宮

大覺寺宮御令旨并「当法務 三宝院御門主」御奉書被相副候、我等「

兩寺へも右之旨申来候、」東寺之儀者、異干他「寺事候間、各無疎」
意、於被勸志候者、可為「欣悦候、不宣謹言

孟夏五日

小池坊僧正

頼意(花押)

智積院僧正

運敵(花押)

(上書)
一 水戸領真言宗新義

諸寺院中「

○頼意は延宝三年七月、長谷寺にて、運敵は元禄六年九月、智積院にて寂。

一〇 竹中重寛書状 一八・九×四七・〇

御状致拝見候、改年之「御慶御同意申納候、」弥御堅固御越年「珍重
存候、将又、例格之通、」御札守被懸芳意、忝存候、「恐惶謹言

竹中主殿
重寛(花押)

二月廿八日
大通寺御報

○竹中重寛は旗本。天明元年三月、祖父の遺跡を継いでいる(寛政重修諸
家譜)。

一一 某書状案

(包紙上書)
謹上 広瀬周左衛門様 嶋一 名乗「

一 筆啓上仕候、然者、「今般御家督様御名弘」被成候ニ付、此間者、
御蒸物「并鮮魚被下之、幾祝納仕候、」就右、此三種進上之仕候、聊
御祝詞表寸志計候、恐惶謹言

八月十日 (花押)

一二 杉原家次禁制 三〇・五×五〇・〇

禁制

一 山王八王子廻、牛・馬放飼事

一 草柴刈取事

一 石場石并石塔猥取事

右條々堅令停止訖、違犯輩在之者、可處嚴科者也、仍如件

天正十一年七月廿日

杉原七郎左衛門尉家次(圖版②)
次(花押)

一三 熊谷直元書狀(折紙)

三二・四×四三・五

尚々、喧嘩停止之事、「下々まで堅可被」仰付候事肝用」にて候哉

日吉以御神事」可被成御勸候由、尤「珍重成御事、如」御意、当城宿老共ニ、「堅申調候間、其段」可御心安候、諸事」如先規、可被成御」調事專一、於此方」御用儀候者、可被仰」付候、致疎意間」敷候、誠被入御念」貴札本懷之至候、「自是以貴面、旁」可得御意候、恐惶」謹言

卯月十日

月行事御報

熊谷次郎左衛門尉

直元(花押)®

○熊谷直元は「東野文書」(『東浅井郡志』第四卷所収)にみえる浅井氏被官熊谷直元と同一人物か。

一四 栗津御供本中書狀(折紙)

三〇・三×四五・五

従三院、御連署」致拜見、忝令存」候、殊更、秀吉様へ」可被成御届候段、「御入魂弥弥存候、」雖然、出錢不相調候て、「令迷惑候、何方にても」錢主相語、調次第、自」是可申上候、恐惶謹言

卯月十六日

栗津御供本(花押)®

執行代御房貴報

○一二号から一四号まで、一卷に成巻されている。なお、以下掲出の折紙については、折り返し部分は切断され反転して表装されている。

一五 東塔執行代触狀(折紙)

三二・〇×四九・五

尚々、已之上刻ニ」御集来所仰候、「次ニ、先度者、允長老、」若狭、板倉殿へ、惣之」御札申、罷帰申候、「様子直談ニ可申入候

来朔日ニ、於中堂、「三院之御集会」相催申候、免合」彼是、御衆談多」候間、谷之老若」共、有御出対、御」相談候様ニ、御催」尤候、如何様之」御隙入候共、御」集来所仰候、「東・西如此相催」申候之間、被成御」油断間敷候、仍」所催如件

慶長九年

正月廿八日

別当代御坊(上書)

執行代(花押)®

一六 正覚院豪盛・南光坊祐能連署書狀(折紙)

三〇・一×四八・五

今日、社頭之興行ニ、「下山候、御院内衆御」隙入候而御殘多存候、「仍大会修行ニ付而」関東衆登山之事、「去年帰国之刻、堅被」請乞墨付も差」越候条、定而此比者」中途迄可為発足候、「雖然、猶念入候て申下」可然旨、□□□候、此書狀」從貴坊、雜齋へ被」仰越、家康様之」内全阿弥へ令申「閔八州之中、天□□□」何之寺へ成共、相届候」様ニ在之度候、一ヶ寺へ」参着候者、從其、次々へ」可有伝達候、全阿弥へ」之事頼申候、恐々謹言

二月十五日

南光坊祐能(花押)

正覺院
豪盛(花押)^⑤

(上書)
飯室谷^{光榮カ}
長寿院法印御房「」

○豪盛(慶長一五年没)・祐能(慶長七年没)はともに延暦寺・日吉社復興に奔走した僧。辻善之助前掲書、尾上寛仲「比叡山再興と地方寺院―天正〱慶長時代を中心として―」(『叡山学院研究紀要』第五号)等を参照。なお全阿弥は徳川家康同朋衆である(『徳川実紀』第一巻「東照宮御実紀附録卷二十」、高橋正彦編『大工頭中井家文書』八九号、全阿弥書状)。

一七 金台坊尊運書状(折紙)

三二・〇×四九・〇

追而催促候、以前、当院へ御届之^(行簡)折紙被付候由、是又以外之^(行簡)虚説にて候、催促以後、金台坊^(行簡)里坊へ被届種々之事、一院への^(行簡)御届ニ被成物ニ候哉、御分別^(行簡)頼存候、幸、三院集会ヲ^(行簡)被催由候間、彼證人被召連、^(行簡)御出候様ニ兩三坊へ^(行簡)被仰届可給候、以上

態令啓達候、仍御院内本住坊^(行簡)領出入付而、去八日、下坂本酒井^(行簡)町益心所江、号御院内惣中、^(行簡)数十人強々之被付催促候、^(行簡)彼町者、当院領内之儀候處、^(行簡)前かと有無之御届も無之、^(行簡)右之御仕立ニ候、其折節、拙僧^(行簡)彼町会所ニ有相候故、罷出候而^(行簡)如何之御催促ニ候哉、今度惣^(行簡)山領年貢免相請不申^(行簡)故之催促ニ候者、法度之儀候間、共ニ^(行簡)申付、可進之候、但、又別条之^(行簡)子細候哉と催促衆ニ相尋^(行簡)申候へハ、本住坊領出入之由、^(行簡)申候間、於其儀者、内々承存候ニ、^(行簡)河副式部方与当本住坊与^(行簡)被仰分有之、未落居候由^(行簡)にて候間、可為如何候哉、第一西^(行簡)院江御届も無之段、不可然御才^(行簡)判候条、先々催促被相引、^(行簡)理之上を以、被相済候様ニと^(行簡)色々申有候而、即刻、御^(行簡)

院内催促御付候衆教本坊・円乗院^(折り返し)本住坊、此御兩三人、上坂本ニ御座候^(使)所江、以吏者、様子相尋申候へハ、益心^(使)かたぐ、本住坊へ出状ニ、彼納置候^(使)御坊領之事、河副殿へ相尋候間、^(使)本住坊へ相渡候へと被申越候者、則^(使)可進候、自然菟角之儀、被申^(使)越候共、百姓前江返し渡可申由、^(使)墨付在之旨承候間、左様ニ候者、^(使)出入ハ重而河副可被相済候、^(使)納米之儀者、益心任墨付、百^(使)姓へ返し候へと申付、翌日、早々相^(使)渡させ申候、此上者、何之被仰分も^(使)有之間敷處ニ、昨日又如此候、御^(使)折紙東・西兩院へ被相付、金台坊^(使)対兵具、町人ヲ引率シ、催促人ヲ^(使)刃傷申なと、以外之虚説被^(使)仰懸候、外聞実儀令迷惑候、其^(使)段ハ、白昼与申、町中之儀候へハ、^(使)其隠有間敷候、其日者、三役者^(使)同道申、日向半兵衛殿へ首信ニ^(使)参候而、直ニ酒井会所へ立寄申候^(使)躰ニ候間、衣袈裟を着し^(使)罷出、口入申たる事ニ候、自身^(使)対兵具、恣之働仕候由之證人^(使)不召出候者、右御兩三坊之可^(使)為御越度候、此等之由、御院内御披^(使)露候而御報所仰候、恐惶謹言

金台坊
尊運(花押)^⑥

二月十一日
別当代御坊

○金台坊は西塔北谷に属し、尊運は第一世。寛永十八年没。本住坊は後に鶏頭院と改められる。この時の房主は三世璩海か。円乗院は横川飯室谷、教本坊は不明。なお、後掲三〇・三二・三三号文書が関連する。また、河副式部は正俊を指すものであろうか。彼は秀吉に仕え、近江神崎郡で百六十石知行、のち秀頼に仕え、慶長九年死(寛政重修諸家譜)。

一八 町野繁仍書状(折紙)

三四・七×五〇・五

追而、此方御親類衆^(使)中無事ニ御座候、^(使)可御心安候、北村

少助も」此十日計以前ニ、江戸」^(行圖)被罷下候、吉忠右ハ、
外記・市助と兩人楊津」建立ニ付て、為御奉行被遣、」被付
置候間、此節ハ懇ニ被」申入ましく候、忠右書状ニハ、」定
而大進ニ言伝上せ候と」被申候事も可有之候」ハ共、大進ハ
いまた遅々候ハん」間、先々少もはやき便宜ニ」存、只今如
此候、以上

当春之御吉兆」雖日昨候、猶以」爾他御満足可被」任貴意候

一 正月十一日之尊書、」此方御使桜井忠左衛門」下着、具拜見申候
一 正月之御祈禱、伏」見於御宿、御執行」御外聞、実儀御満」足之
旨、尤ニ存候、」於此方大慶ニ存候

一 去年地震之以後、」中将殿為御使、被」差下候、飛驒様」御満足
非大形候、」委曲於其段ハ、先」書ニ申入候き

一 此方御寄進料、去年之」物成之後、吉忠右」被入精、早疾不執
得、」手前々請取、袴被」置候ヘ共、慥成便宜」無之ニ付て、相延
候、」只今、禁中御役金」上せ申候ニ言伝、伏見」御宿町田少右

迄遣候間、」可相届候条、慥ニ御」請取候とのうけ取を」可下候

一 近衛様御自絵、御自讀之」一ふく、今時分自由に」不遊之旨候
処、貴院ニ」御所持候を、被懸御意候」とて被下候、扱々過分」至
極、中々存程ハ」御礼不得申入候、忝候、」御隱密之儀ハ、委曲」
承届候、此方、御前様、」御子様達、弥御息災ニ」被成御座候
間、可御心安候、」猶以、御祈念之儀、專」用ニ存候、万吉追而」
可得御意候、恐惶謹言

三月四日

町野左近助

繁 仍(花押)

松禅院尊報

○町野繁仍(重仍)は、蒲生忠郷・秀行の老臣。慶長十八年没。なお、「去
年地震」とは、『駿府記』慶長十六年八月二十五日条「去十三日、会津大
地震、蒲生飛驒守秀之之城郭石壁以下悉震崩」をいうか。

一九 岡山重俊書状(折紙)

三三・五×四九・〇

以上

尊翰致拜見候、」仍下野守ヘ御祈禱」御札守并扇子」五本被遣候、
則」為申聞候、被入御念」段、別而忝被存候、」委細御報被申述候、」
随而私ヘ御札」扇子式本被下候、」忝頂戴仕候、福」吉左衛門ハ今
度」不罷上候条、委曲」国元ヘ遣し申候、」即刻御報可申上」と存候

ヘ共、吉左衛門」同前ニ可申上と存候」内ニ、余ニ延引仕候間、」先
如此御座候、次」吉田孝岐死去付而」跡職善ハニ被申付儀、」御満足
思召候旨、」尤存候、猶追而可得」貴意候、恐惶謹言

七月六日
岡山木工允 重俊(花押)

松禅院様尊答

○『寛政重修諸家譜』には、岡山重俊は紀伊家に仕うとある。

二〇 蒲生忠郷書状(折紙)

三四・五×五一・二

為御見廻、御祈禱」御札并扇子五本」被懸御意候、目出」度致満足
候、」猶期後音之」節、不能一二候、」恐々謹言

三月廿二日
松下野守 忠郷(花押)

松禅院御同宿中

○松平(蒲生)忠郷は秀行子息。慶長十七年襲封、寛永四年病没(『断家
譜』)。

二一 蒲生秀行書状(折紙)

三四・五×五〇・〇

最前者、為御見廻、^(カ)「遠路之處、御下候て」祝着候、殊為其御礼」重而中将被差下候、^(カ)「就其、有任山護摩」御執行之御札并大緒」五筋給候、被入御念候段、^(重政)「本望之至候、猶岡半兵衛」かたゞ可申候、恐々謹言

十月八日

松飛驒
秀行(花押)

松禅院御坊中

二二 町野繁仍・岡重政連署書状(折紙)

三四・五×四九・五

以上

去八日之御状、為御^(忠恕)「使僧中将殿御下候、」就其、^(忠恕)「下野殿へ鷹之」足皮二枚、^(忠恕)「鶴松殿へ」掛香五、御前方へ」同十御進上、則中将殿」御礼御申ニ候、遠路之」處、被入御念候段、御」祝着由候、相心得」可申入旨候、隨而去年」^(折)「御詠候御祈禱之」儀、爰元御仕合ニ付而」御理ニ候、具得御意」候之處、御兄弟様後室様」何も御息災・延命・御^(折)「繁^(返)榮之儀、被抽懇」祈御祈念候様ニとの」御事候間、有其御心得、」御祈禱尤ニ存候、次ニ御」つほねへ懸香ニ、兩人へ」扇子三本宛被懸御」意候、御懇之義、本望」至極ニ存候、委曲、於様子へ、」中将殿へ申渡候間、」不具候、恐惶謹言

七月廿八日

岡半兵衛
重政(花押)
町野左近助
繁仍(花押)

松禅院御報

○岡重政は蒲生秀行老臣。慶長七年以降、町野との連署知行宛行状が出現す

る。

二三 松禅院乗俊書状(折紙)

三四・五×五二・二

十三日之芳翰、十^(上書)「四晨、山室致拜」誦候、双嚴院作事」弘方之儀、御相談被成」度候旨、尤得其意候、」十六日、拙僧出京仕候条」刻、十六日之四時分ニ^(折り返し)「不動院御里坊へ御案内」可申入候間、拙僧里坊へ」御来駕御出可被下候、」乍恐、拙者相談仕候而、」其^(折り返し)「直ニ出京可仕候、」出京以前、此方へ御越」之儀、遠路ト申、」別御用もあるましく候歟、」御ふたハ御無用ニ候、」手前得隙候者、態出」御申入、茶をも進之」度候へとも、時分柄之」儀ニ御座候へハ、不得隙候」間、十六日之四時分ニ、拙僧」おまち可申候、可得御意候、」下山候者、不動院」御里坊へ御案内可申入候、」左様ニ御心得被成、御待奉」願候、恐惶謹言

霜月十四

松禅院
乗俊(花押)

「不動院様

実明房様御報

○不動院は東塔北谷に属する。当院主は二世最順か。なお、八五号文書参照。一五号〜二三号文書は一巻に成巻されている。

二四 某消息(折紙)

二九・五×四五・五

まいらせられ候て」御らんし候へく候、」又そのれい」御入候ハぬ^(行簡)」御事にて候ハハ、」しゆこうさまより」御ひろうハ多^(施薬所)」御さた候ましきよし」心候て申へく候、」又おほせのこ^(折り返し)とく、」そこ御ほとニやくあんの」ふみあいいて」よくおほ

しめし候「まゝ卅日すぎ」まいらせ候までも」御ふたなど
も「まいらせ候へぬ」やうに心候て「申へく候、かしく」返
々御「りんしの」御れい候へ、」やかてく御入候とも」
御ひろう御入候はん「よし申へく候、めてうれしくかしく

御文のやう「ひろう申候、まつくくわん」^(元)さんの^(三)あしき、ひてより

さま「より御つとめにより」御りんしの「御事御申入候、」まへく
より、「そのれい御入候」事にて御入候へ、」おもてむきにてへ」
御入候はん「すれとも、」御ないきにてへ」しゆこうさまより

正かくゐんへ御返事まいる
御申給へ

さ

二五 南光坊祐能書状(折紙)

二九・〇×四三・五

尚々、松法印之御事へ、」従前々、無御等閑御事候、」いつ
くまでも、其通ニ事「御懇ニ貴院さま」蒙仰候事、」^(行間)忝存計
候、「くれく貴院さま」松法印へ被対候て、」此度く御
忠功無」是非事候、」たのもしき事候、」御ふたなども壇
々各々ニハあけられ候「ましく候、惣分として」可被上と
存候、可」御心安候、かしく

従是、捧愚札候ても、申「上度存候處、預尊書」御報ニ被成、心外
候、「仍松法印之事、余ニ」あらくしく被仰候間、「笑止存候て、
僧正語申、「御氣病申候へ、御同心候て」大慶此事候、貴坊」様奇
特ニ御氣遣候て「京へも人を被遣、色々」懇ニ御才覚候事」おとなし
き御事」奉感申候、仍無御」^(折り返し)等閑、御存分有之儘、「被仰聞候事、却
而」本望之事候、可御心」安候、随而昨日者、「養源院へ御茶申候

間、「貴法印を申入度候て、」使者を以、申候所ニ、「是之下僧申候
へ、御」下山を見申候と申候間、「使者をも止申候、御残多」所存計
候、御用候て」御帰候由、御尤ニ候、聽而」奉待候、恐惶謹言

十二月二日

^(真壁)
唯心院法印参人々御中御報

南光坊 祐能(花押)

二六 正覚院豪盛書状(折紙)

二九・二×四六・四

猶々、御懇意之段、皆々」可被感之候、以上

先度、於大坂、新庄」^(直頼)駿州様・同雜斎様へ、」^(藤)従惣山、各被持参候
代」都合五貫文、御返之由候而、「只今持給候、我々何度も」御こと
ハリ申候て、此等之式」御家君と被存ての」御事候条、又進上仕候ハ
てと」皆々可被申候へ共、再三」遠路往還、慮外之」事候之間、先当
坊ニ」預り置、三院各々へ」披露可申候、先度者」新御兄弟さま、依
御」入魂、下坂本以、寄附之」儀、御芳意兼てより」拙老委存上候へ
ハ、生々」難忘御興隆候、皆々も」同心之事候まゝ、何とぞ」御礼も
被申度との事候へ共、」返而隔心かまじきかと」被加遠慮御事候處
ニ、「如此候、猶更御存念」難有、憑敷可被存候」旨、此書状を則御
両様へ」可被遣候、別而請取に」不及御事候、涯分無」失念、披露可
申候、御」院内へハ、別而申ましく候、「此旨御心得申て、御披露」
所仰候、重而御算用之」砌、為納所、可申理申聞候、」可被御心安
候、恐々謹言

七月十四日

唯心院法印御房御報

正覚院 豪盛(花押)

二七 正覚院豪盛書状（折紙）

二九・七×四六・〇

猶々上谷より「被申事へ、更不」可用立候、我等ニ「任せ被置候へく候

先刻下山候、「就其、明日講演」御出仕候て可然候、「子細者、従上谷」重々一書なと「上候由ニ付、不可有」御出仕之旨風聞候、「それハむかしやに候、「西・川申事、指当」たる事候間、此一事「すみ候迄ハ、如何」様之事候共、被聞「遁候て、先御院」内のため存候、以参「申度候へ共、足損候」故、先以書状申候、上谷「より被申越候ハ、」葉院へ申ことハリ「可返之候、可被御心」易候、為其如此候、「将又、算分相之事」憑入候、とてももの「御事に、算之札」六たのミ入候、明日「以面可申候、恐々謹言

三月廿三日 正覚院 豪盛（花押）

長寿院法印御報

二八 西塔執行代書状（折紙）

二九・五×四五・〇

尚以、旧冬算用之砌、「御両坊御存知之事候間、」被入御情可給候、以上

従御院内、当院江「越米参石八斗之事、」急度地帳被相渡候「様ニと、先日茂以折紙」雖申入、干今不能御報候、「去年之所務ヨリ申付」物ニ候處、御延引ニ候、「早々可然所地帳待」申候、恐々謹言

六月十三日

西 執行代（花押）

花徳院

本住坊御房

○花（華）徳院は横川飯室谷に属し、もと山本坊と称した。三九号参照。

二九 田中吉次書状（折紙）

二三・五×四五・二

尚々、委細之儀ハ、「唯心院様へ御尋」可被成候、以上

横川堂領預り分「可相渡旨、則昨日」唯心院此方へ御「出京被成、可相渡之由」被仰候間、銀子相「渡申候、然者、去々」年ヨリ三ヶ年之「分ハ、大方唯心院」様へ相渡申候、然共、「御算用ハ未無之候、」先度々ニ御用之「砌、進上申候キ、」来廿三日、大坂へ御「越候段、御大儀と」奉存候、猶御用儀「候者、可被仰付候、」尤、宗繁々御報「可被申上候へ共、他行」被仕候条、拙子「如此候、恐惶敬白

田中五郎右 吉次（花押）

横川別当代御房様尊報

三〇 東塔執行代触状（折紙）

二九・五×四八・〇

已之上刻、待「申候、何茂御出来」遅々候て、日暮候間、如此候

来十三日ニ、於根本「中堂ニ、三院集会」相催申候、是者、御「院内本住坊ヨリ」御催訴訟付而、「如此候間、谷々へ」態々御触尤候、「已之上刻ニ御出」対候様、奉待候、「仍所催如件

二月十一日

執行代（花押）

别当代御坊

三一 東塔執行代触状案（折紙）

二九・五×四四・七

返々、無相違「御集来専」一候

窓 明後日廿六日「御驗地御談合」以下ニ、於中堂「三院集会催」申候、
史 已下刻ニ「御集来所仰候、」仍所催如件
川 八月廿四日 執行代
別当代御坊

三二 楞嚴院惣中書狀案（折紙） 二九・五×四五・五

うつし

急度以折紙申通候、「然者、当院本住坊領」出入付而、一昨日、為院
内「西塔領分酒井町益心」所へ、催促相付候處、「金台坊、彼町ニ取
籠、」帶道具、益心為最「肩、其町人共引率、」自身手をおろし、「
狼藉之動、^(德)院内催促」之者共、散々打付、既以「及半死、血ヲ被打
出、」其者共干今平臥之「式ニ而在よし、金台坊」余恣之働共、不及
是非候、「惣別加様之儀者、三院」互之事ニ候處、^(折り返し)近比「理不尽ニ最
肩偏頗、」三院之御置目被破手」始、後詰ニ候敷、其上西塔」領分之
間、催促之前ニ、「西塔各々へ、此旨案内」披露之折紙、金台」里坊
迄届置候、右之「狼藉仕候、此旨西院」へも申届候間、御当院」御分
別被成、急度被仰」付可被下候、為其如此候、「恐々敬白

二月十日
東塔谷、
役者中

楞嚴院
惣 中在判

三三 楞嚴院惣中書狀案（折紙） 二九・五×四五・〇

写

追啓、其刻ニ雖可申届候、「爰元不能子細候て」如此候、被
成御分別、「順路ニ奉頼候

急度以折紙申通候、然者、「当院本住坊領出入付而、」一昨日、為院
内、貴院御」領分之益心所江催促」相付候處、金台坊、酒井之」町ニ
取籠、益心最肩」有而、其町人共ニ下代」被申付、当院催促之者共、「
散々打付、既以及半死ニ、「血を被打出、被討候者、干今」平臥之式
有之事、「余恣之働共、不及是非候、「惣別、加様之儀者、三院」互
之事ニ候處、近比如此之」理不尽ニ最肩偏頗、「三塔之御置目ヲ被
破、」其詮無之敷、其上催促之」前ニ、^(折り返し)各々様へ此旨案内」御披露狀、
金台坊迄」雖届置候、右之狼藉」被動候間、更以御分別」被成、急度
順路ニ被仰付者、「何も忝可存候、此由、東塔へも」申届候、抑御分
別、衆徒」一分之衆、自身手を」おろし、浜之雜人ニ「一味有事、可
為如何候哉、「能々御塩味奉頼候、「恐々敬白

二月十日

楞嚴院
惣 中在判

（上書）
一 西院各御中」

〇一七・三〇・三二号文書参照。
二 四号〜三三号文書は一巻に成巻されている。

三四 東塔執行代触狀（折紙） 三〇・四×四二・〇

尚々、御礼ニ御越之」衆、御若輩之衆」可為御無用候、從^(行)
三院、為用脚、代物十五貫文」持参可申候、御院内も其」わ
つふ可被持候、以上

大坂へ之為御礼、「来廿三日、各可有御越候、「就其、^(徳川家康)内府様へ
之」為御礼儀、杉原三束」自三院可然候、於御」院中、御有縁之衆」
可被仰合候、然者、二人」御越尤候、仍所催申」如件

十月十六日

執行代（花押）

別当代御房

○家康の内大臣在職は、文禄五年（慶長八年二月迄である。

三五 正覚院豪盛書状案（折紙）

三〇・二×四一・六

猶々、乍御大儀」必可有御越候

御状拝見候、仍大」坂へ明日、大津越に」可参候、十四屋宗差方へ」

御立寄候て、先被得談^{（為カ）}」合可然候間、乍御苦」勞、貴院、大坂へ御

越」可然之由、内々此方之衆」被申候、御朱印出候者、」其次ニ御礼

をも御申」可然之旨候条、銀」并錢以下被持参」尤候、郡奉行日向方

ニも」朝めし候之様ニ承」及候間、其時分御出」可然候、恐々謹言^{（折り返し）}

（慶長六年乙未）

正廿四

（光孝）

唯心院法印御返報

○本文書は寺領加増をめぐる家康との交渉を示すものであるうか。慶長六年二月、寺領は五千石に加増された『延暦寺文書』徳川氏奉行人連署書状。なお、十四屋宗差は宗佐の血縁者と思われるが詳細は不明。

三六 正覚院豪盛書状案（折紙）

二八・〇×四一・五

かき候ハ、今夜ニ」便宜所へ可被遣候、」可盛用候、以上

明旦、大津御城へ」御一人御院内より、」可有御出候、内府様へ」御

礼可然よし、当院」談合として、西院へも」只今申越候、乍俄時」分

柄事候間、如此折、」御持参可然よし候、」何も盛物なく候て、迷」

惑申候、然者、長寿院ニ」かき候はんほとに、一種」從御院内御合力

なさり」候へく候、此中無キ儀者、」忒種ニ千万調事候、」御あわれ

ミ尤候、我等も」天氣よく候ハ、可参」内存候、然者、明旦向ニ」

下僧上候へと只今申」遣候、いかにいそぎめし」用意候て参可申

候、」恐々謹言

（慶長五年）
九廿一

川

別当代

又

長寿院御房

正覚院

○徳川家康は、慶長五年九月二十日、大津城に至り、二十六日迄滞在している（塚本明「徳川家康の居所と行動」、藤井讓治編『近世前期政治的主要人物の居所と行動』京都大学人文科学研究所、所収）。

三七 東・西執行代連署書状（折紙）

二二・五×四三・五

葛川之儀付候て、山本坊」才判重々不届候」段、歴然候、堅令」衆

撥之旨、衆儀候、」最前御案内可申」之處、延引候間、只」今申入

候、恐々謹言

八月十九日

西

執行代（花押）

執行代（花押）

（上書）
別当代御房

○山本房は、後、華徳院と改める。

三八 日藏坊増恵書状（折紙）

三〇・三×四五・五

尚々、やかて」是を可申入候、以上

今朝、大坂へ」浄教坊御出ニ付、」忒百石わたり候」八木之儀、申談

候へハ、」浄教坊大坂へ」帰次第ニ米渡候へと」申談候、然ハ、八久

右」被申様ハ、志が郡之」未進かたを以相渡」候へと、被申付候、

但、」浄教坊被帰次第ニ」坂本御蔵にて」わたし可申候、」恐惶謹言

正月廿五日

日藏坊

増恵（花押）

（上書）
与川別当殿まいる」

○浄教坊は東塔南谷に属し、後、実藏坊と改める。一世実善、寛永六年九月
寂〔東塔五谷堂舎並各坊世譜〕、前掲『天台宗全書』二十四卷所収。

三九 西塔執行代書状（折紙） 二九・五×四六・〇

以上

態以折紙申入候、從「御院内、当院江越」米三石八斗之事、旧「冬、
於東塔、三院御算」用之砌、本住坊、花徳院「御存知之事候間、地帳
被相渡可給之由、兩度」迄申入處、今更無御存」由にて、不能御報
候、此方「より進候折紙、被指返、」不審ニ存候、御院内坊敷「廿七
坊ニ廿五石宛配分」之余米在之付候て、当院「不足之處へ、可被指越
旨」相究候間、能々御院内御「穿鑿候て、一途可預御報候、」恐々謹
言

六月廿三日

別当代御房

○「慶長六年二月十二日定西・川兩院割付之事」〔山門要記〕参照。

四〇 西塔執行代書状（折紙） 二八・〇×四五・〇

尚々、只今も東「執行代へ礪理申候、」西・川存間敷之由「
申渡候、以上

從東院、金輪院之儀「付候て、今日出京可申」之由、御触候之条、「
生源寺迄罷下候、」然処、自貴院之「如御香物、西・川之称」有之間
敷之由、皆々「西院等も被申分候、」其上正嚴坊・大泉坊「昨日葱瀨
へ被罷下候、」明日生源寺まで「可為貴寺候間、貴院」之御香物披露
可申「間、可然様ニ被仰合」御尤候、次者、葉院「観音寺在世之

返りし（行カ）
刻、」之時、自葉院、三「院へ御引替儀有」之由、書立参候、「則進

上申候、西院「被申分へ、葉院御存」生之内へ、算用も「可申候、只
今年月」事旧候て、仰存間敷「之由、各々被申分候、」定以、能様ニ
西・川「被成御談合御尤」可然候、恐惶謹言

十二月十六日

別当代御坊

○金輪院は東塔東谷、大泉坊は西塔南谷に属する。正嚴坊は不明。

四一 東塔執行代触状（折紙） 三〇・二×四五・二

上儀ニ候条、不可有御「油断候、以上

就金輪院使節之「儀、両長老折紙」如此候、則寫進之候、「然者、御
綻之由候間、」急々為御返事之、「明後十九日午刻、」三院成御集会
申候、「各有御出对、御」談合肝要候、仍「所触申如件

八月十七日

執行代（花押）

東院四谷

八王子頭代

無
政所代

西
執行代

（折返し）
川

別当代各御中

○三四号、四一号文書まで、題箋

「執行代回章 浅野長吉殿消息

西塔執行代消息 新庄駿河守消息

日藏坊消息 消息

執行代消息

正寛院消息二通

が付され、一巻に成巻されている。

四二 板倉重宗書状（折紙）

三四・〇×五二・〇

以上

貴札、殊梅干「一箱、被懸御意、忝」存候、然者、

公方様御祈禱「無御油断被成候由、」一段と可然存候、「来年者御厄

歳ニ」付而、臨時之御祈「禱可有之由尤存候、」御祈禱結願ニ候ハ

ハ「其許々江戸へ」御札進上被申「可然存候、猶期後」音之時候、恐

惶「謹言

極月三日

板周防守
重宗（花押）

（主書）
松禅院御報「

四三 野々山兼綱・板橋政郡連署書状（折紙）

三三・〇×五〇・五

一筆申入候、然者、「女院様（東福門院）為御祈禱、」来ル六日、真読（般）大盤若

被仰「付候間、内々被得」其意、用意尤ニ候、「為御案内如此候、」

恐々謹言

四月朔日

板橋志摩守
政郡（花押）
野々山丹後守
兼綱（花押）

山門

松禅院

○『寛政重修諸家譜』によれば、板橋政郡は明暦二年八月、東福門院付属、
同三年十二月、志摩守叙任。寛文六年四月没。野々山兼綱は、寛永二十年
八月、東福門院付属、同年、丹後守叙任。寛文四年致仕。

四四 京極忠高書状（折紙）

三四・〇×五三・〇

一書令啓上候、為御祈「禱領、知行所高」三拾石之折紙「一通令進覽

之候、」御祈禱被抽舟「情候者、可為本望候、」恐惶謹言

十一月朔日

京極若狹守
忠高（花押）

（果俊）
龍禅院

○京極忠高は、寛永三年少將叙任。同十四年六月没（『寛永諸家系図伝』）。

なお、『横川世譜』松禅院乗俊の項に「某年京極若狹守忠高喜捨齋資三十
石」とある。乗俊の龍禅院入院は元和元年、松禅院に移ったのは寛永八年
である。

四五 蒲生秀行寄進状（折紙）

三二・四×四九・五

会津於分領、「知行百石進」入候、如目錄、全「可有領知候、恐々」

謹言

慶長六
十月十八日
秀行（蒲生）
（玄俊）
松禅院参

○四二号、四五号文書は一巻に成巻されている。

四六 南光坊天海書状（折紙）

三三・〇×五二・〇

尚々、政所様「御返事申候付、」目出今一度、拜「尊顔度候

由、」心得頼入候、「九条殿・二条殿」御下向之由、「随分

御馳走可申候

芳書令披見候、「山上・山下無事之由、珍」重不過之候

（中和門院勸子）
一 女院様より之御返事、「随相届候事

（東福門院）
一 中宮様ニ姫宮様「御誕生之由、都鄙共」目出御事

女院様、政所様「御息災之由、肝要之」御事候

一 御児登山候条、「馳走候由、忝候、^(折り返し)弥無油断、学問」なと候

様、指南頼「入候、法勝寺普請、^(精)白毫院情被入」候由、是亦珍重

候、「将亦、恵心院跡職」之事、恵光坊「相統有之様候之儀、」院

内無別條上者、「於我等者無相違候、」但、名高寺院之間、「一

往、可経 上意候、「定而相違者有間」敷候敷、恐々謹言

十月二日

大僧正 天海(花押)

^(乗俊)
松禅院御報

○『横川世譜』恵心院の項に、四世良範が寛永二年五月に没した後、「当房空主時」同五年、天海が兼帯し、乗俊が「監守」したとある。白毫院は東塔東谷か。恵光坊は同じく北谷。なお、四八号文書参照。

四七 南光坊天海書状(折紙)

三三・〇×四八・五

尚々、政所様「御息災之由、珍重候、」殊法勝寺ニ「石塔」御^(行間)

立被成候由候、「扱々寄特成御事候、」来年者、罷上「閑暇^(カ)

令御満足」可下候由、次而之節「頼入候ハとく」よられ候へ^(敬脱カ)

と「そもし申候、さりながら」御手跡を見候てハ「いつも^(折り返し)

ことく候て」坂本之寺へ万可被加意見候、「かしく^(敬脱カ)

其後者無音候、」正覚院・恵心院「打続遠行之段、」驚入候、堅固ニ^(敬脱カ)

而「其元御座候や、」老僧今者一方「隙明頼敷候処、」力落一重推察^(敬脱カ)

候、「我等事者、前之」比、煩気候へ共、ハヤ「只今者すぎと」快気申^(折り返し)

候、就其、「大御所様頼御指図」故、干今在府申候、「將軍様当月、^(秀忠)

日光へ」御社参ニ相究候へ共、「加納殿御遠行故、」相延候、来月

者、「必定御成候、爰元」別ニ無替事候間、「可御心易候、此中者、」

何とて書状も不被「越候哉、恐々謹言

^(寛永二年)
六月十日

大僧正

天(花押)

松禅院御房

○加納殿は家康娘、奥平忠昌妻。寛永二年五月二十七日没(『徳川実紀』、『寛政重修諸家譜』等)。

四八 南光坊天海書状(折紙)

三三・五×四九・五

尚々、恵心院「跡職之事、何分ニも」被来相統候様ニ「可然^(成)

候、委者」各々可申越候、「返々、」女院様へ「將軍様日光^(行間)

へ」御成出行重「まいり申候故、おそく」承、度々も文「して^(右衛門督)

も不申上候、「迷惑かり申候由」多もんのかう殿「いつ^(折り返し、行)

とのへ」ねんころに「たのミ入候、」わざと人をのほせ「候^(四)

様ニ頼入候、「猶相持かへり候」節可申候、かしく

乍御報、来翰「令披閱候、先以」其元無事之由、珍「重存候、如承

意」將軍様御成御「機嫌能還御、」仕合無所殘候、「過分金銀など^(折り返し)

も」拝領申候、然者、「女院御所様御煩」之由、將軍様「御成候節、

御直ニ」御祈禱御頼被成候「付、承驚入候、」併御本腹候由、満「足

不遇之候、就其」多もんのかう殿へ文「して申入候、これより」わざ^(使)

と吏のほせ「候様にて、文被届」可給候、御返事候ハ、「御くり可

給候、恐々謹言

^(寛永二年カ)
七月廿九日

大僧正

天(花押)

松禅院御報

○中和門院は、寛永二年六月六日・七月二日と病に陥入っているが、後者の場合、内侍所臨時神楽、また三宝院義演等に祈禱を行わせるなど重かった

ようである(『義演准后日記』等)。一方、家光は、七月十三日、江戸城を立ち、二十日、日光社参を終え帰城している(『本光国師日記』等)。なお、右衛門督・いづみはともに中和門院女房。四六号・四八号文書は一卷に成巻されている。

四九 板倉重宗書状(折紙)

三三・五×四七・〇

御状令拜見候、「然者、御訴訟米之」儀、未相済候由、心得「存候、将又爰許へ」御下之儀、重而可申「入候、御書中之通、具」致披閱候、猶期後「音之時候、恐々謹言

三月廿八日

松禅院御報

五〇 観音寺舜興書状(折紙)

三二・〇×四五・〇

以上

一筆令啓上候、仍「上様」御祈禱米百石、拙者「御代官所手寄」候間、「相渡可申旨」候、其御心「得可有候、則御年寄」衆御證之写、小堀遠江殿・「五味金右衛門殿御裏書、我等」方へ参候へ共、貴院へ遣申候、「此方」自然入申儀候者、「可申入候間、御返し可有候、」

恐惶謹言

(寛永十九年)
卯月六日

観音寺
舜(花押)

松禅院

○芦浦観音寺が豊臣政権以来、蔵入地代官を世襲したことは、『草津市史』第五章「芦浦観音寺」に詳述されている。

五一 老中連署寛案

一四・五×四〇・五

寛

一 比叡山勝善院「御祈禱料米」百石之事、当已之「年々被下候間、

取」手形、毎年相渡シ「可有勘定事

寛永拾八年
十二月廿九日

(松平信綱)

伊豆

(阿部重次)

対馬

(阿部忠秋)

豊後

(酒井忠勝)

讃岐

小堀遠江守殿
(改二)

五味金右衛門殿
(豊直)

五二 小堀政一・五味豊直連署裏書案

一四・五×四〇・五

右之通、御祈禱米之「儀、御證文参候間、「写進之候、其方御」代官所手寄「候間、「勝善院手形を取」相渡可有勘定候、「已上
寛永拾九年
正月廿一日

五金右衛門

小遠江守

観音寺

○五一・五二号文書は一紙に書かれている。

五三 観音寺舜興書状(折紙)

二九・五×四一・〇

以上

態以飛脚、可申入處ニ、「正光院」之便ニ頼入候

一 御祈禱料米、御奉書「写、遠江守・金右衛門殿」我等御代官所納

米を以「相渡候様ニと御裏書ニ候、」明日伏見ニ而相調申候間、「
写進入申候、本書ハ重而」之儀ニ可仕候、御奉書ニ「松禅院文字替
候間、」御兩殿々者、本字被「遊候様ニと断申候、併」御奉書之
通、可然由ニ候、「五金右衛門殿被入御念候、」(中坊時亮)中長兵殿御肝煎ニ
候、(折り返し)「其段懸御目可申入候

一 山衆、日光御下之事「申来候哉、未申来候哉、」承度候事

一 何比御上候哉、我等も米「取逗留候、恐惶謹言

(寛永十九年)

三月十五日

觀音寺 舜(花押)

(上書)
「松禅院様人々御中」

五四 板倉重宗書狀(折紙)

三三・七×五〇・五

以上

御狀令拝見候、今「度御祈禱料御」拜領之儀、春日殿・(英勝)榮照院殿迄
被仰「入候由、尤存候、就其」御祈禱米、觀音寺「御代官所ニ而御
渡」可有之由、則五味金右「へも申渡候間、可有」御請取候、猶期
後「音候、恐惶謹言

(寛永十九年)

二月廿日

板倉周防守 重宗(花押)

松禅院御報

○榮照(英勝)院は徳川家康側妾、於加知方、寛永十九年八月卒。

五五 板倉重宗書狀(折紙)

三六・五×五三・六

御狀令披見候、(家綱)「若君様御誕生」被成、天下万民目「出度儀不過之
候、然者、」護摩御守・巻数「春日殿迄、以代僧」御上候事尤存候、
隨而「日光へ無御下候哉、」春日殿へ被得内意「御下候て可然候、何

も期」後音候、恐惶謹言

(寛永十八年)

八月廿八日

板倉周防守 重宗(花押)

○若君は後の家綱であらう。寛永十八年八月三日誕生。

五六 板倉重宗書狀(折紙) 三五・〇×五二・五

以上

御狀拝見申候、然者、「七日迄之御祈禱」相済次第、八日ニハ江戸
へ「可有御下之由、尤ニ存候、」就其、江戸へ書狀之「儀、則相調進
之候、猶、」頓而御上待入存候、恐惶「謹言

(寛永十八年)

九月三日

板周防守 重宗(花押)

松禅院御報

五七 寺社奉行連署書狀(折紙)

三六・〇×五二・五

貴札致拝見候、先以「此表相替儀無御」座、兩上様弥「御機嫌能被
為成」御座候条、御心安可被「思召候、然者、松禅院」儀、昨日首尾
能、御「暇相済、其上御」銀被致頂戴、仕合「殘所も無御座候間、
是」又御心安可被思召候、「自然、此地相応之」御用等も候ハム、可
蒙仰候、「委細者、松禅院可被」申述候間、不能詳候、「恐惶謹言

(寛永十八年)

十月二日

安藤石京進 重長(花押)
松平出雲守 勝隆(花押)

(上書)
「板倉周防守様尊報」

○安藤重長・松平勝隆は初代寺社奉行。なお、板倉重宗の此時期の動向は、
塚本明「板倉重宗の居所と行動」(藤井讓治編前掲書所収)を参照。

五八 老中連署書狀(折紙)

三五・五×五四・〇

御狀令披見候、比叡山「松禅院事、御祈禱被」仰付之、忝存付而、為「御礼參上被申候、右之趣」達 上聞候處、仕合能「被致 御目上候、委曲」松禅院可被述之候、恐々「謹言

十月五日

阿部對馬守 重次(花押)

阿部豊後守 忠秋(花押)

松平伊豆守 信綱(花押)

板倉周防守殿

五九 小堀政一書狀(折紙) 三二・五×四五・〇

貴札拜見申候、然者、「御祈禱料之儀ニ、」御老中々之御折紙「之写、觀音寺御」請取之由御尤候、仍「芳野葛一箱、被掛」御意、忝存候、何様「期面上之時候、恐々」謹言

卯月廿二日

小堀遠江守 政(花押)

松禅院御報

六〇 最教院晃海銀子預け狀

一七・〇×三二・六

南光坊領高百石、成菩提院領高百六拾石、法勝寺「灌頂料并補任料、寛永十五年寅ノ歳收納」辰之歳收納迄ニ而、巳之年中途之弘御勘定「相濟、殘銀合拾貫四百三拾九匁六分、大僧正様」貴院江被為預置者也、仍如件

寛永十八年巳極月 日

最教院(黒印)

松禅院

六一 双嚴院豪俣銀子預け狀

一七・五×三二・四

毘沙門堂御門跡久我村御知行、寛永十五年「寅ノ才辰ノ才取納迄、庄や勘兵衛手形」を以、御弘勘定相濟、殘銀合「百六十四匁六分、御門跡貴院へ被為預置」者也、仍如件

寛永十九年午十月二日

双嚴院 豪(花押)

松禅院

○最教院晃海・双嚴院豪俣は、ともに南光坊天海の側近である。
四九号〜六一号文書まで一巻に成巻されている。

六二 権大納言局消息(折紙) 三四・九×五五・五

返々、御きけんよき「折ふし、よきやうに」ことのくハシく「つかはされ候やうに、たのミ」まいらせ候、かしく

(行簡)

一筆申まいらせ候、「まつく」日光こんけんさま「けつかうにたち」まいらせ候て「御せんくうするく」とみてまいらせ候て、「国母さま御まんそくに」おほしめし候、さやうに候へハ、「ひえの山」せうせん院にて「とりをこない」まいらせ候「ふたんこまの事、」くはうさま御みくにたち「まいらせ候やうに、」御きも入候「よし」国母さまきこしめし「御まん」そくにおほしめし候、「ひえの山の御事と申、」くはうさま御きたうの「御事にて」御入候まゝ、いよく御せいニ入候て「御きも入候へく候、」そなたに「よく此御きたうの」ゆらいは「御そんし候はんまゝ」くわしく申さす候、かしく

(上書)

南光はう

より

「大そう正まいる申給へ」

権大納言」

窓 ○日光東照宮の完成は寛永十四年。

史 六三 権大納言局消息(折紙)

三四・〇×五二・四

いよいよかすか殿・大さう正「御きも入候やうに、」御申入「候へく候、やかてする／＼と」すみまいらせ候て、御上りの「御事といわる入まいらせ候、」かしく

文こま／＼と給候、くわしく「みまいらせ候、まつ／＼」国母様、宮さまかた「御きけんよく」御入候まゝ、御心やすく候へく候一日光こんけんさま「けつかうに」たちまいらせ候よし、数々「めてたく思いまいらせ候

一 ふたんこまれうの御事、「大そう正いかやうにも」御きも入候はんとの御事、「その外ミな／＼も」御きも入候「はんとの御事、めてたく」思いまいらせ候、それにつき「国母さまより、わかミ」ほうしよ、かすか殿、「大そう正へまいらせ候へとの」御事にて「ふたりのかたへのあんし」給候、すなわちあんしの「ことく、ほうしよ」とゝのへまいらせ候まゝ、「御とゝけ候へく候、」此まへ、そもししせうの「ときも、わかミ色々」きも入、大かたすみ候つれとも、「そのゝち何とも御さた」御入候へす候、「こんとハ、する／＼とすみ」候やうにといわる入「まいらせ候、かしく

七月一日

こん

大納言

ひへの山
せうせん院まいる
申給へ

六四 権大納言局消息(折紙)

三四・四×五二・五

覚しめすまゝの「御はんしやうの御事と」よく／＼御きたう「かん用にて候へく候、」御まへさまより「文のとをり、」よく申しあげまいらせ候まゝ、「御心やすく候へく候、」猶々、御きたうりやうの事、「すみまいらせ候、かす／＼、」めてたく思いまいらせ候、「とし月、これの」きつかい申つるに、「相すみまいらせ候て、」我身まてめてたく、うれしく「思いまいらせ候、」めてたくかしく

きのふハ、文給候、「まことに一日ハ、」御まいり候て、めてたく「思いまいらせ候、すはう殿へも」御出候へハ、いよ／＼「御きたうりやうの事、」相すみ、御としより衆「御おりかミのほりまいらせ候」とをり、ねん比に、「御申きかせ候にて、」かたしけなく「御入候つるよし」もつともと思ひ「まいらせ候、」まことに／＼久々の「御せうにて候に、」相とゝのいまいらせ候て、「数々めてたさ、申つくし」かたく候へく候、なを／＼「江戸様、此御所さま」にも御きけんよく「御そく才のよし かしく

(寛永十九年)

正月廿二日

ひへの山

松せん院まいる

こん大納言

六五 権大納言局消息写

○本文書は六三号文書の写しなので省略する。

六六 英勝院消息(折紙)

三三・五×四八・五

御申候ゆへ、御下りなられ候「ハぬよし、御もつともに」^(行簡)そ
んし候、このうへなから「いよくすわう殿御さしつ」した
いに被成候へく候、「返々、御ふみのうち」かたしけなくそ
んし候、「御そせうの事、すミ」まいらせ候て、おなし事
に「よろこひ入まいらせ候」、「一日も御ひきやくに御返事」
しんし候、そのおりふし「すわう殿への御礼ふミ」しんし候
つるまゝとゞき「申候はん」とんし候、「わか身いまた」^(折)き
返し行簡
しよく、しかとも「御さなく候て、いまた」やとにさふらい
申候、「へんく」といたし候、「めてたく申候事候ハ、又
申候、「あなかしく

かさねて御ひ「きやく、こまく」と「御ふミかたしけなく」そんし
候、一日も「さうくひきやく」被下、かたしけなく「そんしまいら
せ候、まつく」両御所様御きけん「よく御さ被成候まゝ」御心安お
ほしめし「候へく候、さてハ、「御きたうれうの事」^(折り返し)すミまいらせ候
て「かたしけなくおほし」めし候よし、「誠にくめてたさ」御心中
におとらす、「わか身もよろこひ」まいらせ候、「両御所様へ御礼
ニ」御下り被成候ハんと、「すわう殿へ御申候ハ、」まつく「かす
か殿」御しゆりんへ文にて「御礼御申上候へとの」事にて「かしく

二月廿四日

ひえの山

松せんゐんさままいる
申給へ

ゑいせう

あん

六七 老女山崎・つほね某連署消息(折紙)

三四・五×五〇・〇

返々、御しうき「上させられ候、「めてたく、幾久しくと」
いわる入まいらせ候、「かしく

御ふみのやう、今度「御代かはりの御悦ニ」御下りのよし候、めてた
く候、「公方様へも御しゆひよく」御めみへのよし、「めて度そんし
まいらせ候、「御台さまへも御もくろく」の通、上させられ「幾久し
く、万々年」もとといわる入、ひろう「申して候へハ、御きけんの」
御事にて、よく心へ候て「それさま御事」くはしく「申まいらせ候、
殊更に」^(梅)御むめの御方御取もち「御せわともの御事にて」御座候つ
る、いよく「御機嫌よく、御長久の」御事にて、幾千代「万世まで
もと」いわる入「まいらせ候、一しうきの」御しるしまてに「こなた
よりも、此」もくろくの通、「つかわされ候、「かしく

せう仙院さま御申給へ

山崎

つほね

(異筆)「尊俊代」

○尊俊は万治二年、院主、元禄九年、退室している。將軍代替りとは、延宝
八年の綱吉の將軍就任を指している。

六八 老女山崎・つほね某連署消息(折紙)

三四・五×四九・八

世もやうくひやゝかに「御さ候へとも、「御そく才の御事

と「めてたくそんしまいらせ候、「わたくし共、」おてるの御かたへも、御かきつけの」通、かたしけなく候、」(行間)いゝわゝ入まいらせ候、此「もくろくの通、三人より」めてたさまでニしんしまいらせ候、「おてるの御かたも、よくく」心へ候て御入候やうにとの「御事にて御さ候、めて」かしく

ひとめは御もく録の「ことく、御台様へ」上させられ、めて度「そんしまいらせ候、」御むめの御方殊之外の「御取もちにて、桑原善ひやうへ」方へも、御申出し候て、「御取つきいたしまいらせ候」やうにと仰付候て「何もく御しゆひよく」御ひろう成申候御事にて「御座候、ひろ庭よりも」申せとの御事に候「上かたへ御参の時分」御用も御さ候ハムとの事「よろつ仰下され候へく候、」御用御さ候ハム、「たのミ入」まいらせ候まゝ、さやうニ「御心へ下され候へく候、」かしく
(上書)
 一

松せん院さま人々申給へ

(異筆)「尊俊代」

山崎

つほね

○桑原昌盛は、御広敷番を経て、元禄七年十一月、御広敷用人に進み、同八年十月没(寛政重修諸家譜)。

六九 老中連署消息(折紙)

三二・〇×四九・九

めてたく「あなかしく

御ふみ拝見いたし候、「公方様、若君様」御きけんよく御さ「なされ候御事、めて」たく覚し召候よし、「其むねをそんし候、」いよく

御そくさいに「おはしまし候まゝ、」御心やすくおほし「めされ候やうに御申」上候へく候、さては「ひゑの山せうせん院」事、御きたう仰「付られ、かたしけなく」そんし候ニ付て「御礼ニ参上申され候、」右のとをり申上候「ところに、仕合よく」御礼あひすミまいらせ候、「なを、せうせん院」申まいらせ候へく候、「かしく

(寛永十八年)

十月五日

まつ平

あへ 一つの守

あへ ふんこの守

あへ つしまの守

こん大納言様御返事申し給へ

七〇 春日局消息(折紙)

三五・〇×五一・〇

なをめてたさ申「候へく候、かしく

国母様より、「将くん様御きたう」おほせつけられ候「御ふた、くわんしゆ」まいらせられ候とて、「御わたくしども」大はんにや御く「り」御きたうへつ「して御さた候」とて、御ふた、くわんしゆ(折り返し)「あけまいらせられ候、」めてたくおもひ「まいらせ候、よく」ひろう申ま「いらせ候へく候、」将くん様いよく「うちつゝき御きけん」よく御さなされ候「まゝ、御心やすく」おほしめし「候へく候、かしく

十一月十一日

あ

かすが

松せん院さままいる

申給へ

七一 板倉重宗消息(折紙)

三〇・三×四二・一

返々、明日御めに「かゝり、申候へく候、」以上

御文はいけん申候、「公方さま、若君さま」御きけんよく御さ」被成、めてたくそんし候、「ひえの山せうせん院」事、此いせん」国母様御かきつけ」にてあいすみ、いつ」ものことく、こめにて」被下候と、京にて申」わたし申候、御たいくわん」衆へ、御年寄衆の」おりかミまいり候ハす候を、「せうせん院又御せうニ」申され候、いかさま御」めにかゝり申候へく候、「めてたくかしく

九月廿四日

(上書)

「権大納言さま御返事

板くら

すはう守」

七二 権大納言局消息(折紙) 三〇・三×四六・五

なをく、をりかミの」事、わかミもしよさい」御入候ハす候、すはう殿へも」よく申候て、かんの」御きたうまへに、

御のほせ候やうに」申候へく候、かしく

御ふみうれしく」思いまいらせ候、「両御所さま一たんと」御きけんよく候まゝ、「御心やすく候へく候、「おりかミの事、「わかミとうりうの内」に、すいふん」きも入候へく候、「すこしもしよさい」御入候ハす候、わかミ」御いとまも、やかて」下され候はんとの」御事にて御入候、「道へもち申御ふた」まほり給候はんよし」かすくうれしく思いまいらせ候、かしく

ひへの山

せうせん院まいる
申給へ

こん

大納言

ぶ

七三 仏乗坊秀珍・双巖院豪侃連署書状(折紙)

三五・〇×五三・〇

尚々、承申候者、「上様御上洛之由候之間、「大僧正ニハ、先々可有」御上候由候間、「以面上、万々」御内存承へく候、「以上

於江戸、大僧正御」屋敷御拝領付、「為御祝儀、龍禪院」態被下、殊綿子」一重、銀子三枚被進候、「被入御念候段、「別而御満足被成候、「殊我々へも数奇」踏皮十足宛被」懸御意候、忝奉」存候、併御隔心候敷、「将亦、西塔福生院」遠行付、跡職貴院へ」造立之由候、於大僧正」少茂無御別条候、「併造立と候へ者、御」法度之事候間、猶、及」大破之由候間、建立」者を見付、貴院」相統候様ニ、西院へ」御相談可然候由、「被仰候、委者、龍禪院」可被申候、龍禪院者、「迷惑かりニ而候へ共、迕」正月御礼ニ吏僧御下」被成候へてハと存、指図申候、「進物御調、正月廿日比ニ、「可有御下候、恐惶謹言

極月十一日

双巖院

豪侃(花押)

仏乗坊

秀(花押)

松禅院様尊報

○仏乗坊は東塔西谷に属し、後、護心院と改称。秀珍は寛永十一年二月寂。なお、『横川世譜』によれば、乗俊は寛永八年、「監西塔福生院」とある。

七四 仏乗坊秀珍・双巖院豪侃連署書状(折紙)

三五・〇×五三・〇

尚々、今度」將軍様日光山」被為成、御機嫌能」還御、大僧

正之「満足、可被成御察し候、

進上 大僧正様尊報

尊翰即大僧正」入御披覽候、然者、「恵心院跡職之事」其元々之御状ニ、「恵心院造立之事、」^(密算カ)相住坊被申渡候と」被仰越付、相住坊」指出、院内申渡候事、「かさおしニ思召候へんと」御腹立候而、此度」落着候御報」参申被越候、於大僧正者、「少茂無御別条候」へ共、右之御遠慮候」条、於無御別儀者、「重而造立と申、」^(良珍)恵光坊へ被仰付」候様ニと被仰越」候之条、可為御同心候、「恐惶謹言

七月廿九日

双殿院 豪 侃 (花押)
仏乗坊 秀 (花押)

横川 別当代

七五 西塔執行代書状案(折紙)

三四・〇×五一・五

跡書

尚以、福生院坊跡しき之儀、「松禪院相続之儀、」無御別条之旨、早速」^(行周)被仰出、一院大慶奉存候、「東執行代白毫院又」申談御事候、以上

陽春之御慶嘉千亀」万鶴、可被任尊慮候、「尊老様弥御勇健之」御事承届、各大慶」奉存候、当山猶更無」事之儀候、御心安可」思召候、将又、旧冬、從」龍禪院方、飛脚差上」被申刻、御書具奉」拜見候、北尾福生院跡」職之儀建立者ニ名付、「松禪院相続可然之旨、」被仰越候条、一院弥相違」無御座候、坊舎破壊再」興之儀ニ、可然様、松禪院」可申談候、一段丈夫間、「建立者と各申御事候、「猶近日御上洛之由承候」間、目出奉待候、可得」尊意候、恐惶謹言

初春八日

執行代

七六 金台坊尊運書状

三三・三×五三・〇

今朝者、早々御出忝候、随而福生院坊領之帳」并納拜、只今北尾久満ニ」持せ被進候、目出度御請取」候て、片時もはやく百性前」^(姓)所務被仰付候て尤ニ候、「今日御出京之事候間、貴様」公人之内一人被仰付、先々当」年斗ハ、此久満案内者ニ、「御そへ候て御納めさせ可然候哉、」恐々謹言

極月廿四日

尊運(花押)

一書 (墨引跡)

松禪院様人々御中

金台房

尊運

〇六二号ノ七六号文書まで一卷に成巻され、次の題箋が付されている。

「権大納言消息 四通

春日局消息 壹通

局方消息 貳通」

七七 南光坊天海消息案

三二・〇×四七・五

一英勝院様 大僧正」

一筆申まいらせ候、上様いよく御きけんよくめてたく御さ候、「さやうに候へハ、此ひえの山のせうせん院と申へ、」^(總見・繼田信長)そうけん院さま
「より、将」きねんとして、ふたんこまおほせつけれ、いま」にけたいなく、とりおこない申候、御ふたハ、まい」ねん上候へとも、此御きたうのゆらい、つるに」將軍様御みくにたち申さす候よしに候まゝ、「それさまをたのミ、御みくにたて申たきよし申候、「よの御きたう所とハかわり、ゆへある御事と」申、又ハ久々く

んこうの御事に候まゝ、御き」けんよき折ふし、御ひろうあそはしつかハされ」候へく候、かすか殿へも、御ふミにて申候はんつれ共、」せうせん院事をハ、よく御そんしの事に候まゝ、」それにもおよび申さず候、それさま御こゝろへ候て、よきやうに御だんかうあそはし、御とりなし候て、」つかハされ候へく候、なをせうせん院かたより」申上候へく候

六月七日

大僧正

返々、上様御きたうの御事にて候まゝ、」ちと御せいに入られ、つかわされ候へく候

英勝院様まいる人々申給へ

七八 南光坊天海消息案

三二・三×四二・四

(端裏書)
「春日殿」

ひえの山せうせん院とりおこなひ申候、將軍様」御きたうのふたんこまの御事、いまにけたいなく、」まい日御きたう申上候、すなはち御ふた、くわんしゆ」それさま御ひろう候て、御はつほなど、御わたくしと」して、つかハされ候よし、きとくなる御事候、」そうけん院様御そんしやうの折ふしより、久々の」くんこうにて候まゝ、御つゐての折ふし」將軍様御みゝに御たて候てつかハされ候へく候、」それさまハ、まへかたより、せうせん院を御そん」しの御事候まゝ、御ひろうもあそはしにくき」御事も候はんかとそんし候て、ゑいせう院さまへ」御ひろうあそはし候へと申まいらせ候、御さた」の折ふし、御そんしのとをり、御とりなし」候てつかハされ候へく候

七九 英勝院消息(折紙)

三二・三×四七・五

返々、かいふん」しよさい」申さず候、御心やすく」おほしめし候へく候、」めてかしく

文仰のことく、」こゝもとおひたゝしき」火事いてき申候へとも、」御しろまわり何事」御さなく候まゝ、御心や」すくおほしめし候へく候、」さてハ、すわう殿御くたりの」時分、文とゝき申候、すわう殿へあいまいらせ候」時分、よく申候へハ、」一たん御かつてんにて」御入候、そもしさま」御くたり」の事も、すわう殿」御さしつしたいに被成」候へく候、かしく

(上書)

二月廿三日

ゑいせう

ゐん

せうせん院さままいる
申給へ

」

八〇 ゑもんのすけ消息(折紙)

三一・四×四六・〇

なをく、きたうのため」いたゝきまいらせ候て、いく久しく」御ほうかう、ミヤ^(冥加)うかにて候、」神々申候やうニと、いわ^(行間)ゐ」おさめ申候、御てまへも、」あいかわらす御し合よく、」御きたうの事たのミ入」まいらせ候、返々、ふしきの」御ゑんにて候、此御ふとう、わか身」所へまいり候と、一入く」ありかたく候、御れいのため申候、」なをこなたより申しまいらせ候へく候、」めてたくかしく

(繕目)

さきほとハ、つきめの」御れいに御まいり候へ共、」院の御所さまへ

窓 ならせられ候「御ともにまいり候」ゆへ、御けさんにも^(見参)入申さす

史 候、つきめの「御れいに御まいり候て」かすくめてたく「思いまい

らせ候、いく久しく「御きたう御きた候やうにと、」いわる入まいら

せ候、」さやうニへハ、御ししやう^(候脇カ)てうしゆん御申おき候」とて、

此ふとう給候、ことに、」かうほう大しの御さく、」たけたしんけん

の「ぐんちんの御まほり」本そんにて御さ候よし、」我身なとしそん^(子孫)

にて「御さ候、一入ありかたく、」かたしけなく思い「まいらせ候、」

きとくニおほしめし「つけ候て、御申おき候」事、一入にかんし入

ゑもんの
すけが

ひへの山^(実俊)
せうせん院殿まいる

○本文書は乗俊の没した正保四年のものであろう。

八一 英勝院消息(折紙)

三三・五×四六・〇

返々、御そく才のよし、」めてたく候、われくも「一たん

そく才にて御さ候、」なをくすわう殿へ「よく申候はんま

ゝ、御心や」すくおほしめし候へく候、」かしく^(行間)

御ふみくわしく「見まいらせ、かたしけなく」そんし候、

公方様一たん御き「けんよく御さなされ候」まゝ、御心安おほし「め

し候へく候、」すわう殿も、ろし^(略文)「中何事なく、御下り」御しやハせ

よく御めうへ^(目上)の御事にて御さ候まゝ、」御心安おほしめし「候へく

候、そもしさまの事、」すわう殿にあい「まいらせ候て申候へハ、」^(折り返し)

大かた」もなく、ねん比の」事にて候、けんまへ^(現米)」をちきやうニ成

候「やうにとの御事にて」いまゝてのひ申候、」よきやうになされ

候」とての事にて候、」いよく^(こ)申このたひ「すミ申候やうに、」か

いふんきもいり「可申候、御下りの事ハ、」すわう殿にうけ「給、御

さしつ可申候、」かしく^(寛永十九年)

二月十六日

ひへの山

松せんゑんさままいる
申給へ

ゑいせう
ゑん

八二 春日局消息(折紙)

三一・五×四七・〇

いよくゆたんなく、」御きねん御さた候へく候、」なをめ

てたくかしく

とをく「ひきやく」御こし候とて、文給候、」かたしけなく思い「ま

いらせ候、」両御所さま御きけんの「御事にて、めてたさ」となたも

おなし「御事にて御入候、」さてハ、いつそや仰候^(折り返し)「御きたうふた

ん」こまれの御事「御みゝたち候て、」御としよりしゆゑ、」ま

へくのことく下され候」との仰出候の「よしにて、かきつけ」御い

たゝきのよし、」かすくめてたく、」われく「まてうれしく思い

らせ候、」かしく^(寛永十九年)

二月廿二日

ひへの山
せうせん院さままいる
申給へ

かすか

八三 慶光院周清消息（折紙）

三二・四×四三・六

はやく御かき物いて「まいらせ候て、」めてたく、いかほとにて候、「両御所さま御そく才にて」御はんしやうなされ候「やうにと、」御きたうなされ候へく候、「わか身とうりうの内ニ、」御くたりなされ候おりふし「御目にかゝり候て、申あけ」申入候へく候、「かすかとのへも、文のとをり、」申候へは、おほしめしを「外ニ、御としよりしゆより、」はやく御かき物まいり候よし、「めてたく、御悦にて御さ候、」わか身よりもよく心へ「申せとの御事にて御さ候、」わか身そく才にて「御しろさまでにて、」つめまいらせ候、「御心やすく候へく候、」めてかしく

二月十一日の文「こま／＼と給候、仰の」ことく、両御所さまいよく御きけんよく「御さなされ、めてたく」御まんまくに「おほしめし候よし、」御もつともにて御さ候、「なひ／＼こま／＼の」御事、御せうかなひ、「御としより衆」より、御かきつけ「いてまいらせ、いたくら」すわうの守殿御上りの「おりふし、御いたゞき」なされ候よし、御し合よく「御さ候御事、これよりも」一しほめてたく、悦入「まいらせ候、おう／＼よりの」御せう御さ候よし、「うけ給候まゝ、いかゝ」御さ候はんやと、御うわさ「のミ申所候、そんしの外」めてかしく

（寛永十九年）
二月廿三日

（周清）
けい光
あん

ひへの山
せうせん院さま御返事申給へ

○神宮徴古館農業館所蔵『慶光院文書』中に、寛永十九年三月五日付の、周清上人宛「御暇付而」、「人馬御朱印状」がある。なお板倉重宗は同年一月十五日、京都に戻っている（塚本明前掲論文）。

八四 英勝院消息（折紙）

三二・五×四七・〇

返々、はやく御かき「つけ出候はかりにて候よし、」仰候まゝ、御心やすく「おほしめし候へく候、」こま／＼申入候はんつれ共、「おりふし、いそかわしく候」まゝ、あらまし申候、「すわう殿へハ、いよく／＼よく」申入候へく候、めてたくかしく

御ふみのうち、くわしく「みまいらせ候、さてハ」御せうの「御事、すわう殿へ」きまゝまいらせ候へハ、もはや「かきつけの出申候」はかりにて候よし「仰候まゝ、さやう御心へ、」いよくこま／＼も、「すわう殿御さしつ」したいになされ候もつともにて候、とを／＼の所「いらさる御こしさにて候、」かならず／＼御まかせ「候てよく候へく候、」すわう殿返事の「うつしも御ミせ、くわしく」みまいらせ候、「たん／＼の」御事にて御入候、「めてたくかしく」

三月
廿八日

ひへの山
せうせん院さま
まいる申給へ
あいせう
あん
「

八五 双巖院豪俣書状(折紙)

三二・〇×四六・〇

尚々、先日之御状ニ、「我等寺之台所・門など」し直し可申候由、被仰」付候、忝御意見候へ共、^(行間)「前かとのさへ過分之」借銀候間、我物」不入候之御意見」一向承引難申候、「客殿直候借銀」返弁も成申間敷候」条、以来者家を」又うり可申候一義にて候、「賢聖院先度之比、」在山之由候、定而今程者」越前へきこくかと存候、「竹林坊被上候事、」うら山敷事候、「御報望可申遣候、」返々、乍御大儀、「法勝寺留守居」今度事、御請し」被成可被進候、若来春、^(折り返し行間)「上洛仕候、定万事」可申承候、以上

先度者、預御状候へ共、其」節、日光へ参詣にての」事候間、不能即報候、「其元御無事之由、專要存候、」大僧正弥々御勇健ニ御座」被成候、先月十七日ニ者、当山ニ」被為成、仏法御伝受、御」機嫌無相殘候、一宗之」大慶不過之候

一 我等寺出来候由、忝候、「併いまにすぎと首尾」不申候由候、^立泫々之事、「頼入存候、はり付之事、」かたかみニ被成可被下候、「庄右門上せ可得御意候

一 法勝寺留守居之事、「貴院被仰付候、定而」可為御迷惑候へ共、大僧正」被入思召候ての事候間、「先御請御尤存候、委細」^(盛意)竹林坊へ被仰付候、此」度、竹と同前ニ罷上、寺」など見申度候、御報を」可被申候

一 毘沙門堂知行七十石敷、「御座候、尊法院へ收納候」事、被為斷候へ共、無」十方事候間、御六ヶ敷御」座候共、貴院へ御頼被成」

候由候、前方之帳など」尊法院跡ニ可有御座候、「是ニ不限、万々御用之事」貴院へ被為頼候之由候間、「被相調可被進候、委細者、」竹林坊へ被仰渡候、恐惶」謹言

十月十六日

双巖院
豪(花押)

松禪院様人々御中

八六 大岡忠吉書状(折紙)

三二・五×五〇・三

尚々、寿軒も御下」山候而、御養生候ハハ、程」も近ク御座候間、一段可」然様ニ被申候間、必御氣」^(行間)分次第ニ、早々御下山尤候、「以上

御状忝令拜見候、「然者、貴様御気色、俄」差発被成候付而、御」氣遣之段、察入申候、「就其、貴寺者、

上々様方御祈願」所にて御座候付て、御」隱居所別寺ニ有之」付而、先其寺へ御」移之由、一段御尤ニ令」存候、先度被仰付候」三御所様御祈禱、「一大事と思召候付而、「松寿院・龍禪院」^(折り返し)其外、日比御兄弟同」前ニ被御申合候仁へ、御」祈禱之儀、功者之」仁ニ有之方へ、

堅御」申付、自然不慮之」儀有之候共、此御祈」禱、兼而御りうくわん」之年月無相違、「御壇御破無之様ニと、「権大納言殿可申達之」由、御紙面之通、具ニ」申談候、則権大納言殿々」御返事出候間、進

申候、「最前も度々申候、御下」山被成候而、御養生候様ニ、「権大納言殿も被仰候間、少」も御氣分ニ能様ニ候ハハ、御」下山尤候、恐惶謹言

八月廿二日

大岡美濃守
忠(花押)(乗俊)
松禪院御報

○大岡忠吉は寛永十年二月、東福門院に付属、美濃守任官、明暦二年没（寛政重修諸家譜）。
七七号く八六号文書まで一巻に成巻されている。

八七 大岡忠吉書状（折紙）

三三・〇×四四・〇

一筆令啓達候、「松禪院御死去候而」、「御力落察入候、就」其、貴僧御事者、「松禪院御弟子之」儀ニ候へハ、忌者懸「申間敷候哉、大」事之御祈禱之「仰付候ニ、若自然」之儀も御座候而、御「祈禱など御執行」被成候儀者、定而御「遠慮之儀ニ、御由」断者御座有間敷候「へ共、権大納言殿左様」之所を御氣遣被「思召候間、承進候間、」御忌も懸候ハ、御中「まの衆へ、御談合候て、」何様ニも御祈禱を「清ク被成候儀專一ニ候、」為其以書状申入候、「恐惶謹言」
（正保四年）
八月廿四日
大岡美濃守
（実俊）
龍禪院御同宿中
忠（花押）

八八 三勢盛信書状（折紙）

三〇・〇×四四・〇

御状忝拜見申候、然ハ、「松禪院御氣色」先日以後、御別条無「御座候へ共、前々御困」景候由、各御氣遣「察入候、寿軒も下山」以後、美濃守所へ御「尋候而、御上り候、折節」他行被「申故、参」会不被申候、拙者懸「御目、御病證之様子」具ニ拙者ニ被仰置候、「則美濃守申聞候、」事外ニ無御心元存「事御座候、内々御見」舞ニ為人可申之由、「被存候へ共、万事御事」多可有候と遠慮「之儀ニ而御座候、権」大納言様へ之御文相屈「被申、御返事得候而」進し被申候、権大納言様、「美濃守存ニも、松禪院」御氣色少も御能御座候者、「御下

山被成候而、御養「生候様ニとの御事候間、」此由龍禪院へも御申、「太郎兵殿、貴様方御」相談候而、御下山被成「候様ニ、御異見御尤ニ候、」恐惶謹言

八月廿二日

杉孫左衛門様御報

○八六・八七号文書は一巻に成巻されている。

八九 板倉重宗書状（折紙）

三四・〇×五〇・六

以上

芳札、殊見「事之蔵一折」送給、恐存候、「何様期面上」之節候、恐惶「謹言」

三月廿八日

松禪院貴報

板倉周防守

重宗（花押）

九〇 大久保忠朝書状（折紙）

三二・〇×五一・五

芳簡令拜見候、如承「意、改年之御慶不可有」尽期候、先以公方様益御機嫌能被成「御座、恐悦之旨、尤之御事候、」然者、如例年、御卷数并「御厄年之御祈禱御札」節分勤修之御卷数并「当年星、何茂以使僧」被献之由、御紙面之趣、令「承知候、随而自分江扇子」一箱、被懸御意、忝存候、猶「期暫之時候、恐惶謹言」

正月廿六日

松禪院

大久保加賀守

忠朝（花押）

○大久保忠朝は延宝五く元禄十一年迄、老中在職。

九一 板倉重宗書狀（折紙）

三三・五×五一・六

史
御狀拝見仕候、「然者、御手前之」儀、次而御座候ハハ、「可達上聞候、「我等無事ニ罷有候、「猶期後音之時候」条、不能具候、恐惶」謹言

七月廿三日

板倉周防守
重宗（花押）

松禪院御報

九二 板倉重宗書狀（折紙）

三三・九×五一・〇

以上

御狀忝存候、殊「五ヶ葉之箱老」送給候、御心付之「至、過分存候、猶」期面上之時候間、「不能巨細候、恐惶謹言

卯月五日

板倉周防守
重宗（花押）

松禪院御報

九三 觀音寺舜興書狀（折紙）

三二・八×四九・〇

尚々、手形御越」可被成候、金右殿御出被申」候や、承度存候、以上

（五味置）

一筆令啓上候、然者、「遠江殿・五金右殿ハ八木之」手形、此者御渡可被」下候、我等書付可進存候」得共、重而示合儀ニ可」仕存候間、左様ニ御心得」可被成候、猶京都金右殿」御出被成候や、御供」不仕、御殘多相存候、「定而一昨廿八日、御帰山」可被成存候、相替儀」無御座候や、今日ハ、「山王參詣仕候、今程」隙ニて、清兵殿江戸」下候者、弥隙為成候、「懸御目、咄申度存事候、「猶期後音之時

候、「恐惶謹言

（上書）
七月朔日

松禪院様まいる

觀音寺
舜興（花押）

九四 松禪院乘俊書狀案（折紙）

三一・五×四八・五

拙僧所身漸取詰申候」間、相果可申候、生中」御懇切共、忝存候、然ハ、「近年、^{（中根正盛）}竜岐守様御芳」情故、当坊御祈禱之」義、首尾能御札指上」忝奉存候、

御当家御祈願所之」事候間、弥無相違」様奉憑候旨、竜岐守様へ」書中指上候、龍禪院」若輩者之事候間、「可然御指南候而可被下候、」恐惶謹言

松禪院

乘俊

昌龍院様

本実成院様

九五 松禪院乘俊書狀案

一書申上候、我等拙子」去年ハ之所身、^{（勞）}絶不得」快気、漸取詰申候間、相」果申候て可有御座候、然ハ、「近年者、御祈禱之義ニ」付、御懇情共、難忘奉存候、「当坊跡之義ハ、御当家御祈願所之」事候間、弥無相違」行事相続仕候様、御」憐愍所仰候、恐惶」謹言

松禪院

乘俊

中根沓岐守様人々御中
(正盛)

○中根沓岐守は、寛永十五年、沓岐守に任官した正盛であろう。寛文五年没(『寛政重修諸家譜』)。

九六 松禪院乗俊書状案

拙子所身^勞、不得快気、「漸取詰申候間、相果」可申候、生中大僧正様、御門主様「御憐愍・御恩賞、二世」迄、難忘奉存候、壽少「殘命候而御用とも■、■無念存候、当跡之事、」御当代御祈願所之事候「間、行事退転不仕候様ニ」奉頼候、龍禪院諸「事不器量者之事候」条、御指南所仰候、此等「之趣、御門主様へ被仰」上可被下候、恐惶謹言

松禪院

乗俊

最教院様

双巖院様

○九四・九五号文書は、一紙(三四・〇×五〇・〇)の上・下部分に書かれている。

九七 松禪院乗俊書状(折紙)

一三・五×四六・五

寸志之印ニ、雪村「二幅沓対、瀬戸」四角茶入進上仕候、御慰ニ於御所持者、「可為二世之本懐候、」恐惶謹言

八月十六日

松禪院
乗俊(花押)

板倉周防守様人々御中

○本文書、折り返し部分を切断して表装されている。

九八 板倉重宗書状(折紙)

一二・八×四六・五

先師乗俊より之書置・「折紙二通披見申候、」御祈禱折紙之通、「油断有間敷候、龍禪院」儀者、不及申、末々弟「子ニ至迄、乗俊折」紙之通、相違有間「敷候、将又二幅一对雪村」山水鳥之絵并瀬戸「茶入、我等所へ為遺物」給候、誠御志之段、祝着「申候、然共、二色なから」御寺へ寄進申候間、「長ク寺ニ置可被申候、」恐々謹言
正保四年
十月十九日
板倉周防守
重宗(花押)

叡山(実俊)

松禪院

龍禪院
(昌海)

○乗俊は正保四年八月二十二日寂。松禪院は実俊が、龍禪院は昌海が跡を継いだ(『横川世譜』)。

本文書は、折り返し部分を切断し、前号文書の下部に表装されている。

九九 松禪院乗俊書状(折紙)

三四・五×四七・五

所勞俄指迫取詰申候「間、ケ候ニ候者、相果申ニ而」可有御座候一「貴殿様、自来之御憐愍」愍・御恩賞、筆紙ニ「難尽奉存候、御祈禱」領拝領仕候付而、及大「破候坊舎・仏閣并仏」像等再興仕候事、偏「公儀御厚恩、二世之」本懐不過之奉存候

一 松禪院坊跡者

御当家、從御治世之「初、及五十年余、天下」安全之勤行、無断絶「御祈願所之事候間、」弟子龍禪院朝暮「可奉抽精祈之旨、吳々」申置候、若御祈禱方「於如在仕者、器量之僧」被成御吟味、後住被仰付、「行事退転無御座候」様、偏奉憑存候、繼目「御礼等之

窓 義も、奉仰」御憐愍候之外、無他候

(異筆)「尊俊代」

史

一 自然無筋目族、宝徳」を妨申者、於御座候者、当」住持、定而御断可申上候、「御祈願所御本房之」規模相立候様、奉憑候、「恐惶謹言

八月十六日

松禪院 乗俊(花押)

(別筆) 一通之状之内

正保四年

十月十九日

板倉周防守 重宗(花押)

(上書) 板倉周防守様

(別筆)「歡山」

松禪院

龍禪院

〇八八号〇九八号文書は一巻に成卷されている。

一〇〇 勘解油小路消息(折紙)

三一・五×五二・四

なをめて度」あなかしく

此はるよりのめて」たさ、いよ〳〵となた」にも御きけんよく、「一入めて度おハしまし候、「さやうニ候へ者、此十六日ニ、「此御所にて、てんとくの」大はんにや御おこない」候やうニとの御事に」おはしまし候まゝ、「まへ〳〵のことくニ、「そう衆へ御申つたへ候て、「めて度御しこう」候へく候、なをくハしくハ、「ほり川三位殿より」御申候へく候、「めて度かしく

(上書)

ひえの山にて

松せん院とのへまいる

かての

小路

一〇一 東福門院女房権中納言・梅小路連署消息(折紙)

三三・五×五〇・〇

御わたくしにも」御無事の事、「めてたさ、いつもの」ことく、御きとう」の御ふた御わけ候て、「めてたく、いくひさしく」もと、祝入まいらせ候、われ〳〵も、「御事も御うれしく」思いまいらせ候、めてたくかしく

御ふみ見まいらせ候、「本院御所さま、此」月の御きとう」よく〳〵御申候とて、「いつものことく、「御札しん上候」かきつけのことく、「めてたくひろう」申まいらせ候へハ、御機」けんの御事にて候、「いよ〳〵御きけんよく、「いくひさしく」御長久の御きとう」御申候やうにと、「いわる入まいらせ候、「まつ〳〵世も」すくしく」なりまいらせ候、「いよ〳〵」御きけんもよく」ならせ候まゝ、「御心や」すく候へく候、「かしく

(上書)

ひえの山

松せん院へ御返事

梅小路

権中納言

一〇二 東福門院女房石見・能登・左京連署消息(折紙)

三三・五×五〇・五

なを〳〵、いつものことく、「此もくろくの通、」御あけ候て、「是又ひろう申入候へハ、」御き嫌の御事にて候、誠に、「御長久の御事にて、幾百々年も、」相かはらすと、い

わぬ入まいらせ候「御事にて候、めてたくかしく

返々、御祈禱御初尾として、「いつものことく、杉原十帖、

銀子一枚」被遣候、いよくとなたにも、「御き嫌よく、幾

久しく、「千世万代迄もと、なをよく」御祈念御申入候様ニ

候へく候、「めてかくし

文のやう、殊に「此月の御きたう」能く御とりおこなひ」のよしに

て、御札「御なて物御あけ候て、「かすくめてたく、「幾久敷もと

ひろう」申入候へハ、御き嫌の「御事にて候、「女五の宮様（賀子内親王）ニも、御機

嫌「よき御色にてならせられ候、「なをうちつゝかせられ、「御機嫌（折り返し）

よく、おしつけ」御快然被遊候やうニ、「能く御祈念御申入候へ」く

候、「めてたくかしく

(上書)

さ京ぶ

ひえの山

松せん院殿御返事

能登石見「

○女五宮（賀子内親王）は、寛永九年誕生、元禄九年没。

九九号一〇一号文書は、一卷に成巻されている。題箋「臨時御祈禱御達

六八迄」が付されている。

一〇三 広橋兼廉書状（折紙）

三一・五×四一・七

此方より可申入候處、「却而御書畏入候、「然者、暑氣時分」弥々御無

事之由、「多幸ニ候、七月」護持相統御勤「被成度由、成程」御勤修

可成候、「尚、御上京節、「得御意可申入候、「恐々謹言（折り返し）

六月廿二日

兼廉（広橋）

(上書)

功徳院僧正

兼廉「

○広橋兼廉は、元禄六年四月、任権右少弁、宝永三年二月、参議に叙任され

ている。

功徳院は守澄法親王より、尊俊が賜った房。尊俊は元禄二年権僧正、同七

年僧正、この年、内殿護持僧となる（『横川世譜』）。

一〇四 口上之覚（折紙）

三一・五×四七・〇

口上之覚

来五月、護持之事、可為御勤「仕候哉、内々得御意候也

四月十五日

広橋弁（兼廉）

功徳院僧正御房

一〇五 口上之覚（折紙）

三一・〇×四六・五

口上之覚

来六月、護持之事、「可為御勤仕候哉、内々」得御意候也

五月十四日

広橋弁

功徳院僧正御房

一〇六 東福門院女房権中納言・梅小路連署消息（折紙）

三一・二×五〇・〇

御祈禱修行の御事、「その御きとくにて、「かやうにうちつ

ゝかせ」られ御きけんもよき」御通ニ、御ものも少つゝ（行間）「あ

からせられ候て、一しほ」めてたさ、みなくまでも「悦入

まいらせ候御事にて候、「御私にも御ふしにて、「めてたく

思いまいらせ候、めてたくかしく

窓 文のやう、みまいらせ候、「本院御所様御ふれい」の御様躰、よき

御通ニ、御かゆなとも「少つゝあからせられ候」まゝ、御心やすく候へく候、「まづ〳〵此月の」御祈禱、例のこと〳〵修行のよしにて

御ふたしん上候、「めてたくひろう」申まいらせ候へハ、「御きけん^(折り返し)」の御事にて、幾久しくもと祝いらせられ候、「御ふれい御さわ

〳〵の」ようにと、また「御祈禱修行の」よしにて、御ふた「しん上候、御きけんの」御事にて、かす〳〵めてたき、誠ニ〳〵よくそ何かとたひ〳〵御せぬニ入」まいらせ候て」かしく

(上書)

ひえの山

松禪院へ御返事

梅小路

権中納言

一〇七 東福門院女房権中納言・梅小路連署消息礼紙

三二・一×四五・七

なを〳〵、子・むまへ御すい日にて候まゝ、「御よけ候て、御ふたしん上候へく候、」かしく

(上書)

梅小路

松禪院へ参

権中納言

一〇八 東福門院女房権中納言・梅小路連署消息(折紙)

三二・五×五〇・五

御きけん少よろしく、「一しほめてたき、いよ〳〵」おしつ
け御さわ〳〵の」めてたきにて、いく久しく「千代万世まで

も」めてたき御祈禱」御つとめ候やうにと、祝」入まいらせ候、御私も」御ふしニ御つとめにて、「めてたくおはしまし

候、「なをめてたく、あなかしく

文の通、みまいらせ候、「本院御所様御ふれい」この程は少よき」御通ニ、御かゆなとも「少つゝあからせられ候まゝ、「御心やすく候へ

く候、「さやうに候へハ、日外」御申入候こと〳〵、「かつら河にて」御ふれい御本復」あそハされ候やうにと、「御祈禱のこま」修行候

て、する〳〵と」みてまいらせ候とて、「御撫物・御ふた・かう水・」

しねんしやう一折」しん上候、めてたく」ひろう申まいらせ候へハ、「御きけんの御事にて」おはしまし候、御かちも」御勤のよし、誠ニ

御祈禱せぬニ入られ候」きとくにて、この比ハ」かしく

(上書)

ひえの山

松禪院へ御返事

梅小路

権中納言

一〇九 東福門院女房権中納言・梅小路連署消息(折紙)

三二・五×五〇・〇

なをめてたく」あなかしく

一筆申まいらせ候、「本院御所様御機嫌」御勝れあそハされ候」ハす候まゝ、御祈禱」仰出され候、「あす」十六日、御日からよく」候まゝ、大はんにや」経御修行候て、「めてたく御ふた」しん上候へく候、「すなハち、御撫物・」御たん料銀子」十枚めてたく」つかハされ候、御祈禱」の御きとくにて」めてたく御本復」あそハされ」候やうにと」いわぬ入まいらせ候、「めてたくかしく

(上書)

松禅院へ参

梅小路

権中納言「

一一〇 東福門院女房権中納言・梅小路連署消息(折紙)

三二・五×五〇・五

なをく、御私ニも「御ふしに御つとめ」めてたさ、我々共之事も、「過分さ、ふしにつとめ」申候、めてたくかしく

文の通、みまいらせ候、「本院御所さま此月の」御きたう、例のことく、「御しゆきやうのよし候て、「御ふた・ひわ一折」しん上候、めて度」ひろう申まいらせ候へハ、「御きけんの御事にて」幾ひさしく「千世万代までもと、「祝いらせられ候、「御きけんも打つ」か^(折)せられ候、よき御通ニ」ならせられ候まゝ、「御心やすく候へく候、「いつもく御きたう」御せいニ入候ゆへ」御きけんもいよくよくならせられ候、「めてたさやかて」なを御すきく「御事と祝入まいらせ候、「かしく

(上書)

ひえの山

松せん院へ御返事

梅小路

権中納言「

一一一 東福門院女房権中納言・梅小路連署消息(折紙)

三二・五×五〇・五

なをく、御私ニも「御ふしに御つとめ、「めて度思いまいらせ候、「我々共へも、いつもの」ことく、一おけつゝ給

候、^(行間)「くわふんさ、いく久しくもと」祝入まいらせ候、「な

をめてたくかしく

御ふみのとをり、「みまいらせ候、まつく、「本院御所さま、いよく御機けんよくならせ」られ候まゝ、御心や」すぐ候へく候、さてハ、「いつものことく、「此月の御きたう」御勤候て、三ヶ月待、十五日御日まち^(折り返し)御七夜まち、廿三夜」待の御ふた、ならひニ「あふみなつけ」御かれいのことく、「しん上候、めて度」ひろう申まいらせ候へハ、「御きけんの御事に」おはしまし候、幾ひさしくもと、祝」入まいらせ候、「かしく

(上書)

ひえの山

松せん院へ御返事

梅小路

権中納言「

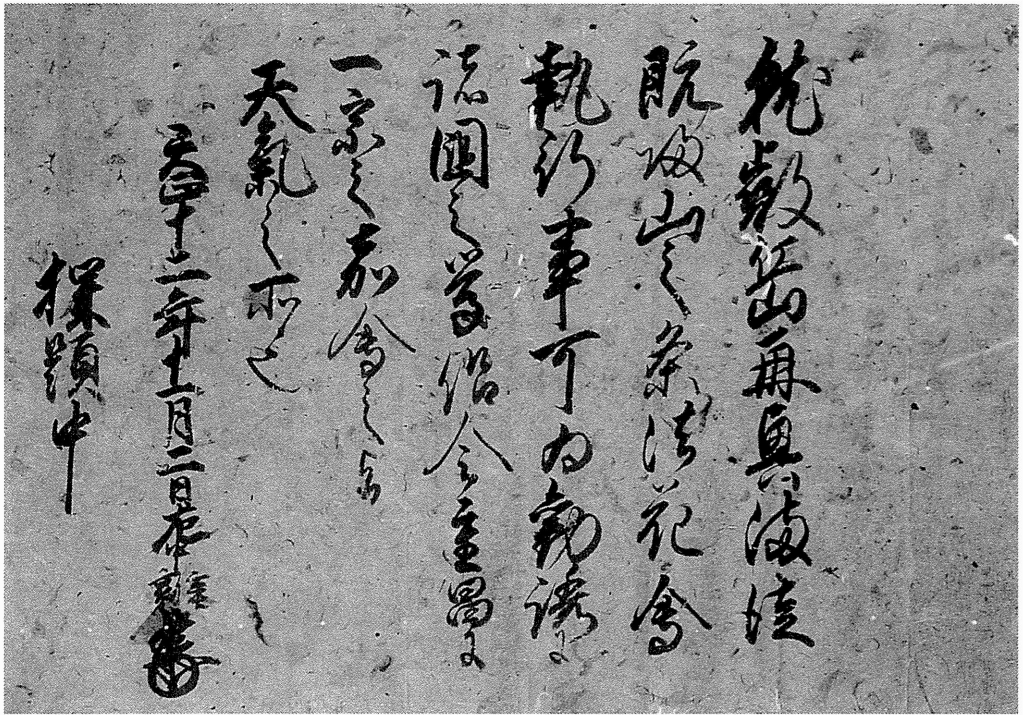
〇二〇二号〜二一〇号文書は一巻に成巻されている。題箋

「月並護持被仰付御達 三通 式々四迄

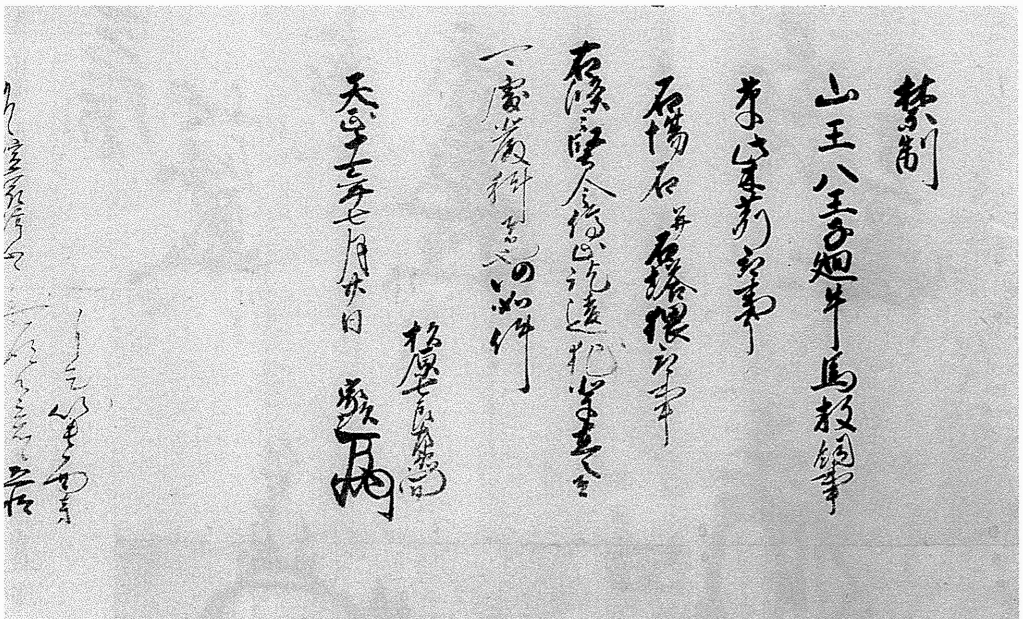
臨時御祈禱御達

五通

「が付されている。



図版(1) 正親町天皇綸旨(1)



図版(2) 杉原家次禁制(12)

① 板倉重宗 (2)



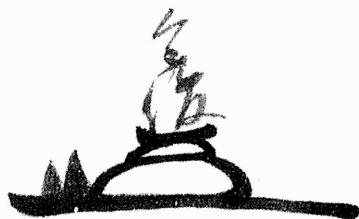
③ 栗津御供本 (14)



⑤ 南光坊祐能・正覚院豪盛 (16)



⑦ 岡山重俊 (20)



② 熊谷直元 (13)



④ 執行代 (15)



⑥ 金白坊尊運 (17)



⑧ 蒲生忠郷 (20)





⑨ 蒲生秀行 (21)



⑩ 岡重政・町野繁仍 (22)



⑪ 松禅院乗俊 (23)



⑫ 西塔執行代 (28)



⑭ 執行代 (30)



⑬ 田中吉次 (29)



⑯ 西塔執行代・執行代 (37)



⑮ 執行代 (34)

増進

①⑦ 日藏坊増恵 (38)

西塔

①⑧ 西塔執行代 (39)

西塔

①⑨ 西塔執行代 (40)

執行代

②⑩ 執行代 (41)

板橋政郡・野々山兼綱

②⑪ 板橋政郡・野々山兼綱 (43)

蒲生秀行

②② 蒲生秀行 (45)

京極忠高

②③ 京極忠高 (44)

②④ 南光坊天海 (47)



②⑥ 安藤重長・松平勝隆 (57)



②⑨ 双巖院豪倪・仏乗坊秀珍 (73)



③⑩ 大岡忠吉 (86)



②⑤ 観音寺舜興 (50)



②⑦ 小堀政一 (59)



②⑧ 双巖院豪倪 (61)



③① 三勢盛信 (86)

